

平成28・30年度一関市内遺跡発掘調査報告書

建長の碑遺跡 猫館遺跡

平成31年3月

一関市教育委員会

序

一関市は、市の中央部に北上川が南へ流れ、西には奥羽山脈、東には北上高地がある自然豊かな場所です。その自然環境に対応して、旧石器時代から人々の生活が確認でき、多数の埋蔵文化財包蔵地が所在しています。当教育委員会では、これら包蔵地の性格を明らかにするための内容確認調査や、開発行為に伴う緊急発掘調査を実施しています。

本報告書は、平成28年度に実施した建長の碑遺跡発掘調査と、30年度に実施した猫館遺跡発掘調査の成果をまとめたものです。本書により、これらの調査成果を広く公開し、市民並びに全国の方々にも当市の文化財を知って頂き、関心が高まることを期待しています。また、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

最後に、調査に際しては地権者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々のご協力を頂きました。衷心より感謝を申し上げます。

平成31年 3月

一関市教育委員会

教育長 小 菅 正 晴

例 言

- 1 本書は、岩手県一関市教育委員会が平成28・30年度に実施した一関市内遺跡発掘調査の報告書である。
- 2 調査対象は、建長の碑遺跡（一関市川崎町門崎字石蔵42-1）、猫館遺跡（一関市大東町曾慶字猫館69-3）である。
- 3 猫館遺跡の調査については、国庫補助事業及び県補助事業を活用した。
- 4 調査主体は、一関市教育委員会 教育長 小菅正晴であり、現地調査は文化財課が担当した。建長の碑の現地調査に関しては、一関市博物館および川崎支所地域振興課の協力を得た。
- 5 調査体制は以下のとおりである。

平成28年度	教育委員会	文化財課	課長	佐藤武生
			文化財係長	畠山浩
			学芸員	菅原孝明
			文化財調査研究員	畠山篤雄
			文化財調査研究員	山川純一
			文化財調査研究員	二階堂里絵
	一関市博物館		主任学芸員	鈴木弘太
	川崎支所地域振興課		課長補佐	今野道太
平成30年度	教育委員会	文化財課	課長	佐藤武生
			文化財係長	坂本光司
			学芸員	菅原孝明
			文化財調査研究員	畠山篤雄
			文化財調査研究員	二階堂里絵
			期限付臨時職員	菅原友明

- 6 本書の作成は文化財課が行い、担当箇所の文末に執筆者名を付した。
- 7 本書の図2、図9、図10に使用した地形図は、一関市長の承認を得て、測量成果を複製したものである。（許可番号 平成31年2月14日総第11016号）
- 8 土層断面図の土色表示は新版標準土色帳1997年度版（日本色研事業株式会社）を用いている。
- 9 建長の碑遺跡の地形測量および猫館遺跡の無人航空機（UAV、通称ドローン）による遺構の空中撮影は株式会社菊池技研コンサルタントに委託した。
建長の碑遺跡の最明寺石塔婆の覆屋及び石塔婆の移動復旧は、有限会社寿工業に委託した。
- 10 猫館遺跡で出土した陶磁器の鑑定については、羽柴直人氏（公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター主任文化財専門員）の指導を頂いた。
建長の碑遺跡の最明寺石塔婆碑面についての応急処置については、赤沼英男氏（岩手県立博物館上席専門学芸員）の指導を頂いた。また、碑面白色付着物について、脇谷草一郎氏（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター主任研究員）より指導を頂いた。
- 11 調査協力者・機関（敬称略・順不同）
（建長の碑遺跡）赤沼英男、工藤武、狭川真一、佐々木繁喜、佐藤成一、鈴木徳男、田中則和、千葉昭男、千葉仁一、千葉忠正、脇谷草一郎、岩手県教育委員会、岩手県立博物館、石蔵山最明寺、奈良文化財研究所
（猫館遺跡）羽柴直人、畠山潔、畠山啓太、畠山知代志、畠山則男、曾慶市民センター

目 次

序 ..	1
例言 ..	2
目次 ..	3
I 一関市の位置と環境 ..	4
II 発掘調査報告 ..	6
1 建長の碑遺跡 ..	6
1 遺跡の位置と地理・歴史的環境 ..	6
2 調査に至る経緯 ..	9
3 調査結果 ..	9
4 最明寺境内の中世石造物 ..	12
5 まとめ ..	13
6 資料 ..	14
写真図版 ..	24
2 猫館遺跡 ..	38
1 遺跡の位置と地理・歴史的環境 ..	38
2 調査に至る経緯 ..	38
3 調査結果 ..	38
4 まとめ ..	40
写真図版 ..	45
抄録 ..	54

I. 一関市の位置と環境

一関市は、岩手県の南端に位置する。平成17年9月20日に一関市、花泉町、大東町、千厩町、東山町、室根村、川崎村の7市町村が合併、さらに23年9月26日に藤沢町と合併した。東西に約63km、南北に約46kmの広がりを見せる市の総面積は1,256.42km²である。

中央部を北上川が南流する市域は、西側に奥羽山脈、東側に北上山地がある。著名な記念物は、コニーデ型二重火山である栗駒山（須川岳）を中心とする火山性山岳風景地の「栗駒国定公園」（昭和43年(1968)国指定）や北上川水系磐井川流域の史跡「骨寺村荘園遺跡」（平成17年(2005)国指定）および重要文化的景観「一関本寺の農村景観」（平成18年(2006)国選定）、下流部には変化に富んだ渓谷景観をなす名勝及び天然記念物「巖美溪」（昭和2年(1927)国指定）がある。東側には同じ北上川水系の砂鉄川流域に、名勝「狛鼻溪」（大正14年(1925)国指定）がある。



国指定史跡 骨寺村荘園遺跡



国指定名勝及び天然記念物（地質鉱物） 巖美溪



国指定名勝 狛鼻溪

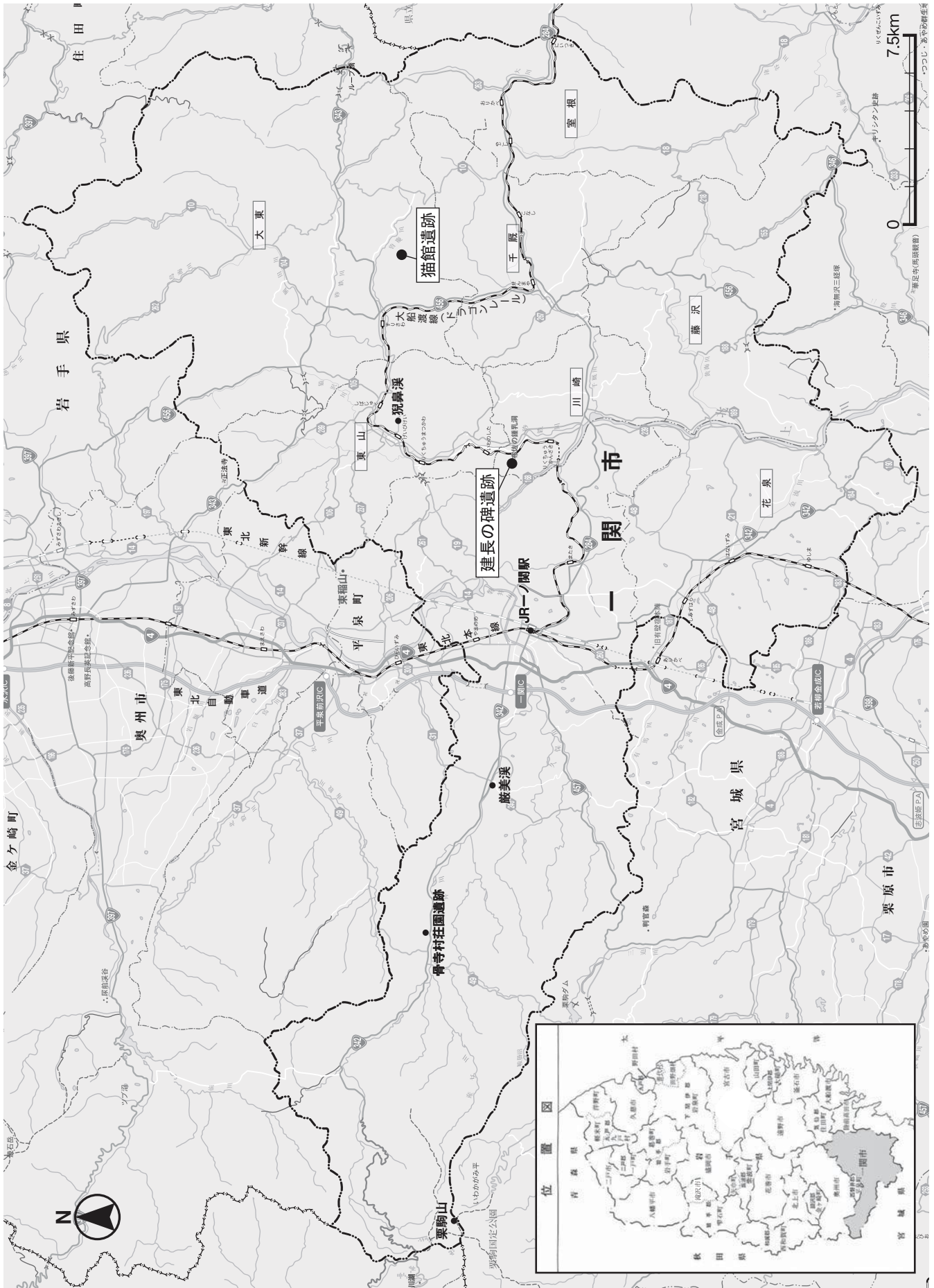


図1 建長の碑遺跡・猫館遺跡位置図

II 発掘調査報告

1 建長の碑遺跡

1 遺跡の位置と地理・歴史的環境

(1) 遺跡の位置と地理的環境

建長の碑遺跡は、JR 大船渡線陸中門崎駅の北北西2.2km、岩ノ下駅の南1.2km に所在し、遺跡の沖積地を砂鉄川が南流する（図1）。石蔵山（355.6m）から東に伸びる下位丘陵の先端部で、北には石蔵山最明寺が隣接する。最明寺が所在する沢は堂が沢と呼ばれている。この上流には布佐洞穴遺跡があり、洞穴内から流出する湧水により小沢が形成されている。他にも西側の山稜から流れ出る小沢が所在する。大船渡線は大正14年（1925）7月摺沢駅まで開通しており、近傍の地形が大きく変化している。また、布佐農道が昭和56年（1981）開通し最明寺境内への交通事情が変化している。銅金沢の上流部に高金山があった。

本遺跡を含む周辺は二畳系の石灰岩や登米層などの粘板岩、薄衣型礫岩が発達している。砂鉄川の上・中流域には石灰岩帯に形成された鍾乳洞や洞窟開口部に、洞穴遺跡が数多く所在する。

(2) 歴史的環境

本遺跡には、岩手県指定有形文化財「最明寺石塔婆」（考古資料）が所在する。この石塔婆は双式碑で、建長8年（1256）の紀年銘を持つ。岩手県内では最古であり、東北地方では、下白山供養塔（建長5年銘（1252）（福島市飯坂町））に次いで4番目の古さである。双式碑は、同じ場所に2基建てて供養する場合と、1基に2人分の供養をする場合があり、前者の例は、岩手県内では最明寺石塔婆と、駒籠の板碑（嘉暦元年銘（1326）（奥州市江刺））の2例のみである。

こうしたことから、昭和50年（1975）3月4日、岩手県指定有形文化財（考古資料）「最明寺石塔婆」として指定された。岩手県立博物館が、展示用レプリカの製作を行い公開している。

石塔婆の立地する隣接地には、石蔵山最明寺（以下「最明寺」）がある。安永4年（1775）に書かれた「磐井郡東山南方門崎村風土記御用書出」（『宮城縣史復刻版27（資料編5）』）に次の記載が見られる。

一旧跡 二ツ

石蔵野山

一古社跡 往古熊野権現社跡之由申傳候先年より古社地ニ小屋掛仕今に修復

等相加置候事

ふさ

一寺跡 右ハ往古石蔵山最明寺と申候由申傳候處退転年月并宗旨等も相知不申候右旧寺

へ先年迄小屋相立阿弥陀堂又ハ最明寺庵と申唱道心者指置差置當村御百姓墓所場

ニ御座候且又先年御書上仕候節ハ阿弥陀堂と申上置候處間違御座候間此度佛閣之

部へ御書上不仕候右最明寺往古有来候什物左ニ御書上仕候事

一毘沙門天 一体 木佛立像 御長二尺 雲慶之作

一阿弥陀尊 一体 木佛立像 御長二尺

但作者相知申不申候事

一薬師如来 一体 木佛立像 御長一尺八寸

但作者相知申不申候事

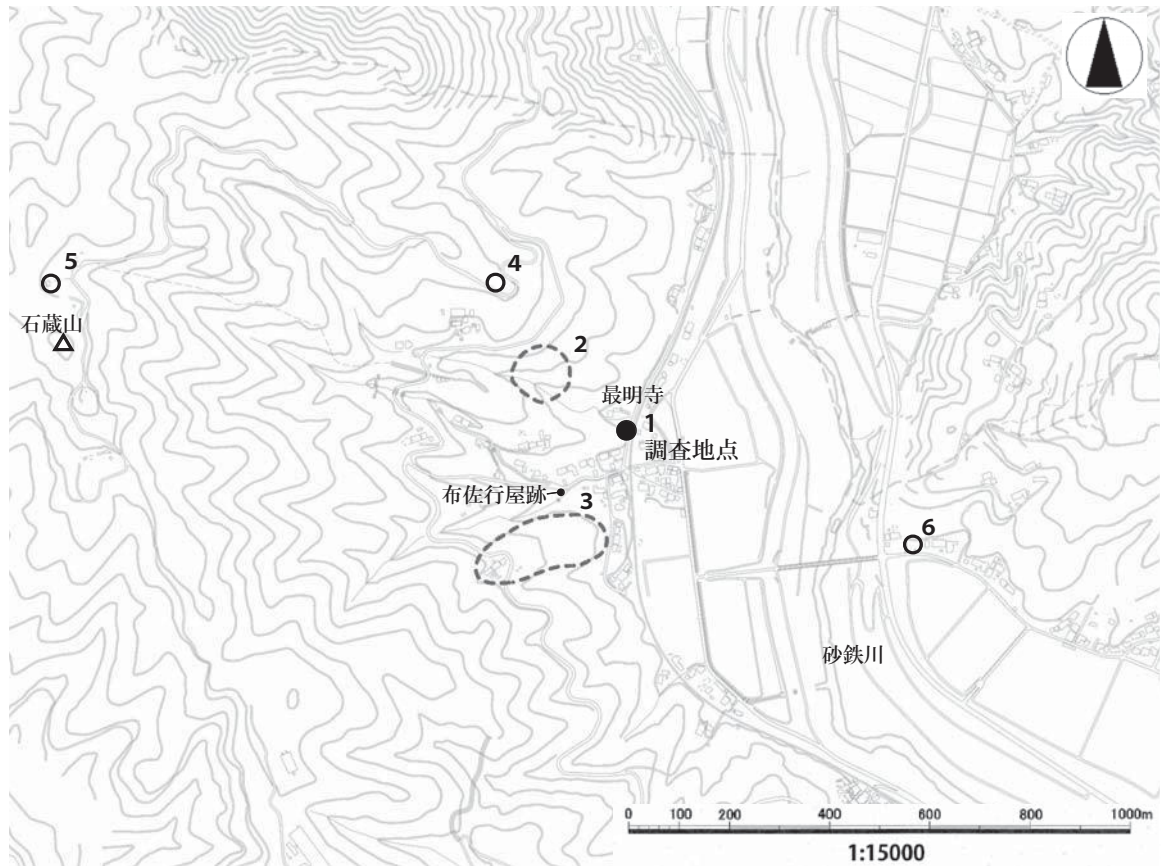
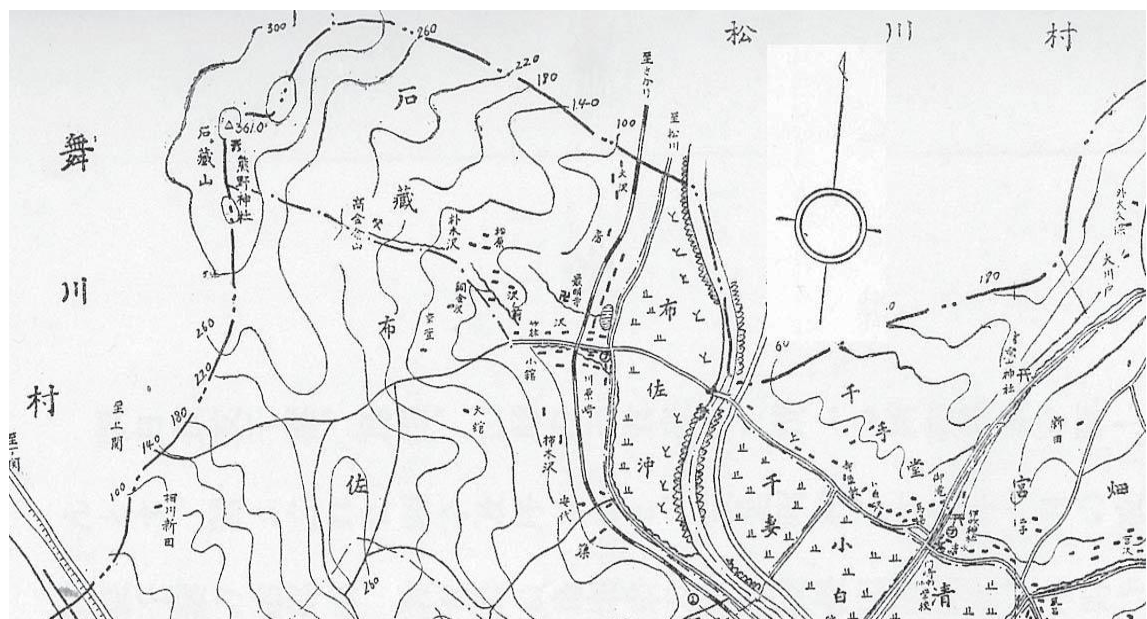


図2 調査地点および周辺遺跡位置図

番号	名称	所在地	時代	種別	出土遺構・遺物	文献	備考
1	建長の碑	門崎字石蔵	中世	石碑	石塔婆	『門崎村史』他	双式碑
2	布佐洞穴	門崎字石蔵	縄文	洞穴	縄文土器	『岩手の洞穴遺跡』	昭和55年調査
3	布佐館	門崎字布佐	中世	城館	腰郭、空堀	『門崎村史』他	
4	経塚	門崎字石蔵	中世	塚	経塚	『前平泉文化関連遺跡調査報告書』	
5	熊野神社	門崎字石蔵				『門崎村史』他	
6	観音堂	門崎字千手堂	平安	寺跡	仏像	『川崎村の主な仏像』	

表1 周辺遺跡および寺社一覧



※門崎村(1956)『門崎村全図』の一部に加筆して転載。

図3 「門崎村全図」(『門崎村史』) の調査地点周辺

一観世音 一体 木佛立像 御長六寸

但作者相知申不申候事

一不動明王 一体 木佛立像 御長八寸

但作者相知不申候事

一扉 六枚 長七尺五寸 横二尺

右は飛騨内匠作乃由申傳候事

とあり、安永4年(1775)当時は、仏閣としての記録がなく旧跡として扱われている。

石塔婆については、次の記載が見られる。布佐に所在する3基のみ抜粋し掲載する。

一古碑 五ツ

堂ヶ澤脇

一供養碑 高三尺五寸 幅二尺一寸

石面梵字一字建長八年丙辰二月二十九日と文字有之候處

安永四年迄五百十九年罷成候事

最明寺境内

一供養碑 高四尺五寸 幅一尺六寸

石面梵字一字永仁二丙申十二月二十九日と文字御座候處

當安永四年迄四百十一年ニ罷成候事

同上

一供養碑 高五尺 幅一尺八寸

石面梵字一字徳治三年戊申三月十八日と文字有之候處徳治三年より當

安永四年迄四百六十七年ニ相成候事

最明寺境内の墓地には、「平泉型宝塔」と呼称される石塔が近年1基確認された。墓地の西側斜面には、徳治3年(1308)銘の石塔婆1基の所在が知られていたが、他にも数基の所在が近年確認されている。また、岩手県立博物館の調査により、西側山中の尾根に石積を持つ経塚が確認され報告されている。その他、境内北側の沢を登った場所に鍾乳洞である布佐洞穴遺跡が所在し、開口部平場の発掘調査が過去に実施されている。砂鉄川流域には、洞穴遺跡が多く所在しているが、調査された数少ない遺跡の一つである。

指定文化財「最明寺石塔婆」(昭和50年(1975)岩手県指定)は、安永風土記では1基のみの記載で現況と一致しないが同一のものと見られている。

周辺の遺跡の分布状況は表1、図2のとおりである。同遺跡の東の千手堂集落には、千手堂があり平安後期とみられる仏像群が所在する(川崎村教育委員会1982)。

本遺跡の南側丘陵には、中世城館「布佐館」が所在する。城主は布佐伊予と伝える。『仙台領古城書上』、『磐井郡東山門崎村風土記御用書上』に記載されている。

『門崎村史』には、最明寺について『往古磐井郡花布佐石蔵山最明寺略縁起及び略縁起及旧跡左エ頭す』(P302~P306)との項に記載されている。また『寛永18年布佐風土記』が掲載されている(P118~P124)。「門崎村」は、寛永19年(1642)の仙台藩の検地の際に村境が確定し成立している。以前は、「布佐村」であったという(6資料参照)。

最明寺の西方に石蔵山(標高355.2m)があり、熊野神社が鎮座する。同神社は『門崎村史』によれば、「◎熊野神社 本社は祭神伊邪諾命事別男命速玉命の三柱にして、本村字布佐石蔵山にあり。養老年中陸奥守大野東人紀州熊野より移齊し、近郷の鎮守と称し奉水り、平泉藤原氏社領を給へ又、葛

西清重より世々燈明料として祭田を寄附し当時国土鎮護の祈誓のため日々献膳をなせしと云う。分社を本村字房、松山、鬼木、鯨谷、五分一、川崎、袖沢、小豆沢に建立せり、依って九熊野という。祭日は三月、九月の二十九日である。」とある。

安永4年(1775)の風土記御用書出には、前述のとおり「古社跡」として記録されている。また、『寛永18年布佐風土記』(6資料『門崎村史』引用)において、最明寺と熊野権現社についての勧請、開基の記載がある。なお、本風土記には寛政、文化の記載もあるから成立年代はその頃と見られる。

布佐集落には、文久3年(1863)から伝承が続く「布佐神楽」があり、岩手県指定無形民俗文化財に指定され集落一丸となって取り組んでいる。房、大沢、川原崎、柿木沢、安代、沢、竹林、小館、大館、沢ノ前、銅金沢、朴木沢、柏原等の小名があり地域の歴史を垣間見ることができる(図3「門崎村全図」参照)。

本報告書において、「石塔婆」も「板碑」も同一のものをさして呼称している。一般的には「板碑」が使用されているが、調査対象とした指定文化財名称が「最明寺石塔婆」であること、川崎村教育委員会編『川崎村石造文化財第1部 石塔婆(板碑)』においても、石塔婆の名称を用いているので、本文中は「石塔婆」として使用する。また、他からの引用においても、指定文化財についてはその名称を用い、指定されていないものについては板碑と表記する。表3磐井郡(一関市・平泉町)の紀年銘板碑(鎌倉期)においては、石塔婆と板碑の両名称を使用した。

2 調査に至る経緯

平成28年(2016)3月4日、石塔婆の現況確認のため現地を訪問した折、左方の碑(金剛界大日如来石塔婆)が右方の碑(胎蔵界大日如来石塔婆)に覆い被さるように倒伏した状況であった(写真図版1-3)。石材の性質から判断し、相互に接触すると破損する事が想定されたので、状況を考慮し川崎支所地域振興課担当と連絡を取り碑と碑が接触しないように応急処置した(写真図版1-4、1-5、2-1、2-2)。

本石塔婆は、岩手県指定有形文化財(考古資料)であることから、岩手県教育委員会に第一報を入れた。その後、定期的に現地確認を行うと共に改善処置について検討を行った。当初の応急処置は、碑と碑が接触しないよう毛布をはさんでいたが、指定文化財の南西側に設置されている水槽(コンクリートブロック製)からの漏水が指定文化財の周囲の土地に湿気を与えていることもあり、過度の湿気と呼び込んでいると推定されたため、毛布を撤去した。また、両石塔婆の碑面の正面及び背面から、塩と推測される白色の粉状物の付着物が地面際に確認された。

所有者との数度にわたる協議を踏まえ、石塔婆の位置を正確に把握し現地保存するための確認調査を、当教育委員会が行うこととした。写真撮影は、デジタル一眼レフカメラを用いた。野外調査は平成29年(2017)3月7日から3月30日、調査面積は5.5㎡である。

次のとおり基準点を設置した。(世界測地系第X系)

基 T-1 X = -117920.807 Y = 35589.938 H = 22.825

基 T-2 X = -117960.868 Y = 35584.063 H = 23.709

3 調査結果

今回の調査の目的は、①石塔婆の地下の状況を確認し、貯水タンクからの水漏れの影響を把握する。②現状地形を記録する。③石塔婆の現状調査を行う。④傾倒している石塔婆を復旧し建てなおす。の4つである。

(1) 土層

調査地の土層は次のとおりである。2層が石塔婆の据え方を確認した層である。

- 1層 10YR3/3暗褐色粘土質シルト。粘性ややあり。しまりやや弱。木の根を多量に含む。腐植土。表土
- 2層 10YR4/4褐色粘土質シルト。粘性強。しまりやや弱。明瞭な混入物なし。石塔婆の据え方を掘り返した層か（時期不明）。
- 3層 10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト。粘性中。しまりきわめて強。第6層の小・中ブロックやや多く径3～5cmの礫を微量含む。造成層か（時期不明）。
Bライン北端最下層の小・中ブロック、やや多く径3～5cmの礫、微量含む
- 4層 10YR3/4暗褐色粘土質シルト。粘性ややあり。しまり極めて強。板碑の据え方に西接する石積状の部分の上に乗る。小型の扁平なる石を水平に積み重ねている。下部に長軸5～30cm大の礫を極めて多量に含む。造成層か（時期不明）。造成層時期不明
- 5層 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト。粘性なし。しまり極めて強。径1～3cmの礫を少量含む。
- 6層 10YR4/6褐色粘土質シルト。粘性中。しまり極めて強。明瞭な混入物無し。地山粘土質土が造成時（時期不明）に大きく動かされた可能性が高い。
- 7層 10YR4/4 褐色粘土質シルト。粘性やや強。径1～3cmの礫を少量、長軸5～10cm大の礫を微量含む。
- 8層 10YR4/4褐色粘土質シルト。粘性強。しまり強。長軸5～10cm大の礫を微量含む。地山。

(2) 遺構

トレンチを2本設置しA,Bトレンチと呼称した。Aトレンチ（幅0.5m、長さ6m）は南→北方向、Bトレンチは（幅0.5m、長さ5.6m）西→東方向である。石塔婆の立つ位置が中心になるようトレンチを配置し（図4・5、写真図版3-3、3-4）、人力で掘り下げ、土層断面を観察した。

上部集石・石塔婆据え方（写真図版3-7、3-8、4-2、5-1）

トレンチにおいて確認した第2層が、石塔婆の据え方であることを確認した。角礫が上面から入れ込まれている。入り方が規則性のある状況とは認められなかった。範囲は、第2層の範囲に収まるが、東側においてはトレンチの低位まで見られる。時期不明である。

『門崎村史』掲載写真（P354）、『川崎村石造文化財 第1部 石塔婆（板碑）』掲載写真（P32）でも部分的に確認できる。覆屋が掛けられた頃には現状に近い形になったと推測される。

また、聞き取り調査で過去に掘り返されたことを確認しており、現状では石塔婆建立当初の状態ではないと考えられる。

下部集石（写真図版5-2）

Bトレンチ東側の下部第4層で確認した。小型の扁平な石を水平に積み重ねている。上部集石角礫に接している。上部集石の東端に第4層がのる。造成時期は不明である。

上記以外は、トレンチ内では明瞭な遺構を確認できなかった。石塔婆復旧後の地盤の安定を考慮し、据え方部分は全体を掘りこまないで最小限に抑えた。

(3) 出土遺物

磁器片、陶器片、鎌刃先破片が出土した。何れも石塔婆据え方の上部及び角礫の間からである。表

面からの混入と考えられる。石塔婆の造立年代に関わる遺物は確認できなかった。

磁器・陶器片（写真図版12-5・6）

輪花皿の破片2点（同一個体）である。器種不明の陶器片1点である。石塔婆据え方内の表面、角礫の間から確認された。19世紀以降のものと見られる。

鎌刃先破片（写真図版12-7・8）

鉄製である。石塔婆据え方内の表面、角礫の間から確認された。刃先が欠損し峰と刃線が半分ほど残存（10.3cm）、柄に入る部分が7cm釘穴1個確認できる。全体に錆びが進行している。年代は不明である。

（4）石塔婆

石塔婆の所有者は、「最明寺の石塔婆」について、「カメカタオカの碑」と言い伝えている。漢字表記は不明である。千葉家において代々祭祀を行っておりお盆にお参りし、日常は周囲の草苺等環境整備に当たっている。覆屋は、先代が昭和50年代に古材を活用して設置したものであるという。この覆屋の効果で雨水等からの直接的な影響は少なく今日の姿を保っている。

石塔婆の現状調査に先立ち、業者委託により覆屋の移動、石塔婆の移動を行った。地下調査の結果は前述のとおりである。石塔婆は、仮置き状態で養生を行い写真撮影記録（写真図版3-5）、拓本等の調査を行った。

本石塔婆は、双式碑で二基一対である。左方（向かって右側）を1号碑（金剛界大日如来種子石塔婆）、右方（向かって左側）を2号碑（胎藏界大日如来種子石塔婆）として以下記載する。『川崎村石像物文化財 第一部石塔婆（板碑）』（川崎村文化財調査報告書第5集）では「金胎大日如来種子双式石塔婆」と呼称している。これは、金剛界と胎藏界を併せて呼んだものである。

1号碑（金剛界大日如来種子石塔婆）（図7、写真図版9・10）

本石塔婆は、全長144.5cm、幅61.5cm、厚さ15cmである。石材は粘板岩である。この石材は門崎周辺では確認できない。全体の形状は、頭部を三角形に整形している。頭頂部は、富士山の形状である。基部（下部地中部分）は特段の整形痕は見られない。下部の左方が長く右方が短くなっている。地中に建てる際、尖っており建てやすい反面、地盤の安定が無い場合は右方に傾きやすいことにつながり、地盤環境の変化により直立は難しいと推察される。

左右の頭部下方において羽刻みが確認できる。碑面は頭部から界線区画部を中心に整形されている。土中埋没部分は加工痕の確認が難しい。背面は特に加工の痕跡は見られないが、側縁は整形の痕跡が見られる。

界線の区画は、最大値で縦69.5cm、横49.5cmである。上下左右で数値の差がある。二区に区分される。上区は縦44.5cm下区は縦25cmである。上区に月輪があり径32cmである。月輪の中にバン（金剛界大日如来種子）が彫られている。斜度の緩い葉研彫である。下位に蓮座を設ける。蓮の実の上面も描かれる。下区の中央に「建長八年丙辰二月廿九日」と彫られている。建長8年（1256）は10月5日「康元」と改元されている。

上区の土中埋設部分は劣化が進んでいるように見受けられた。土砂等の汚れを除去し、観察した結果剥離が認められたので、カボチャ球打診棒による打音検査を碑面全体に行った。その結果、基部を中心に空隙の存在が推測される鈍い音を確認した。岩手県教育委員会とも協議し、岩手県立博物館の指導を得て応急処置を行った。

2号碑（胎藏界大日如来種子石塔婆）（図7、写真図版11・12）

本石塔婆は、縦117.5cm、幅48cm、厚さ12cmである。石材は粘板岩で1号碑と同じである。全体の形状は、頭部を三角形に整形しているが1号碑のように明瞭ではない。縁辺部全体に調整痕が見られる。基部（下部地中部分）まで整形痕が見られ碑面の調整が確認される。上部の幅が下部より狭い。基部の地中部分は鍋底状である。

左の頭部下方において羽刻みが確認できる。碑面は頭部から界線区画部を中心に整形されている。土中埋没部分は加工痕の確認が難しい。背面は特に加工の痕跡は見られないが、側縁は整形の痕跡が見られる。

界線の区画は、最大値で縦63cm、横38.5cmである。上下左右で数値の差がある。二区に区分される。上区の中に月輪に囲まれたバン（胎蔵界大日如来種子）が彫られる。月輪の径は26cmである。種子は1号碑と同様の斜度の緩い葉研彫である。下位に蓮座を設ける。実の上面も描かれる。下区の中央に「右志者為父母二親也」と彫られている。

土中埋設部分は1号碑同様に剥離が認められたので、カボチャ球打診棒による打音検査を碑面全体に行った。その結果、基部を中心に空隙の存在が推測される鈍い音を確認した。岩手県教育委員会とも協議し岩手県立博物館の指導を得て応急処置を行った。

（5）指定文化財の応急処置

1号碑及び2号碑の基部について、概要を前述したが、土中に埋没している碑の一部に劣化状態を確認した。土砂の除去後の観察により剥離が見られたため、カボチャ球打診棒による打音検査を行った。（写真図版6-5、7）1号碑、2号碑とも基部を中心に鈍い音がし空隙の存在が推測された。また、2号碑については、剥離部分の一部が欠け、他の空隙部分も破損の恐れが予想されたので、その対策について、所有者や岩手県教育委員会と協議した。その結果、所有者から修理届を提出してもらい、応急処置については岩手県立博物館の指導を得て当教育委員会が行うこととなった。パラロイドB72を使用し、市販の接着剤により修復した（写真図版6-1～4）。

また、両碑とも地表面と接する部分に白い粉状の付着物を確認している。写真を奈良文化財研究所保存修復研究室に送付し、内容の確認を依頼した。その結果、塩の付着であろうとの見解であった。原因については不明である。応急処置としては、乾布等での拭き取り除去を行ったのみである。

空隙及び塩への処置はあくまでも応急処置であり、板碑の継続的な定期観察を要するものである。今後市内に所在する他の石造文化財についても常時注視していく必要がある。

4 最明寺境内の中世石造物

（1）石塔婆

ここでは、指定文化財以外の石造物について述べる。最明寺境内には、18世紀後半の風土記により石塔婆の存在が知られている。1-(2)で紹介したとおりである。一関市・平泉町内の紀年銘のある鎌倉期の板碑については、表3を参照願いたい。最明寺は、古い紀年銘の板碑の集中している場所である。

『川崎村石像物文化財 第一部石塔婆（板碑）』では、5基の報告がある。内1基（双式碑）は前述のとおりである（表3参照）。

永仁四年銘金剛界大日如来種子石塔婆（図8-3、写真図版14-4、表2・3）

本石塔婆は、庫裡の背後に所在する。地上高144cm、幅53cm、厚さ14.8cmである。紀年銘に「永仁二二年」とある。「二二」は「四」の異体字で「四」の音が「死」に通ずるのをきらったものと報告

されている。

徳治三年銘阿弥陀三尊種子石塔婆（図8-4、写真図版13-3、表2・3）

本石塔婆は、当初基地の斜面に建っていたが現在は倒伏し標柱のみが建っている。倒伏のため碑面の確認はできない現状である。

延慶二年銘金剛界大日如来種子石塔婆（表2・3）

本石塔婆は、『岩手の石塔婆』、『川崎村石像物文化財 第一部石塔婆（板碑）』に掲載されているが、所在が不明である。

延慶三年銘種子不明石塔婆（表2・3）

本石塔婆も、延慶二年銘金剛界大日如来種子石塔婆同様所在が不明の報告がされている。

無紀年銘勢至菩薩種子石塔婆（図8-5、写真図版14-1～3、表2）

本石塔婆は、最明寺本堂右方の碑群の中に所在する。サク（勢至菩薩種子）が彫られている。下方に偈頌^{げじゆ}、戒名らしき字が見られるが判然としない。「妙口禪尼」と判読した。偈頌は、最初の1行を「一切諸法」、2行目を「皆是^因相」3行目を「口生死滅」、4行目を「无口无口」と判読した。全長63cm、幅21cm、厚さ13cmである。石材は不明である。

その他の石塔婆（写真図版13）

最明寺境内墓地斜面に数基の石塔婆が確認されている。詳細の調査は行われていない。また、前述の永仁四年銘金剛界大日如来石塔婆の背後に立つ石塔婆と見られる石碑がある。近接しており、全体を把握できないが、石塔婆の可能性が高い。

（2）平泉型宝塔（写真図版14-5・6）

境内個人墓地に「平泉型宝塔」が1基確認されている。溶結凝灰岩製とみられている。高さが44.1cm、最大径34.6cm、底部32.1cm、首部分の径が21.6cmである、塔身下部に径21.5cm、深さ4.6cmの抉りがある。梵字が3面にあり、2面にバン（大日如来種子）が確認される。本来は4面にあったものとみられる。『前平泉文化関連遺跡調査報告書第33冊』（岩手県立博物館2016）において報告されている。

また、この「平泉型宝塔」については、一関・平泉周辺において、19基確認報告されている。近隣では有壁五輪塚（宮城県栗原市金成有壁字熊口）においても2基所在している。

5 まとめ

（1）建長の碑遺跡

第2層の石塔婆据え方遺構の角礫の入り込み状態から攪乱が多いと推定された事から、現在の石塔婆の地下状況は、造立当初からの状態ではないと判断した。

- ア、所有者からの発掘調査前の聞き取りで、「（布佐）洞窟の調査をした時に、石塔婆の根元（？）を掘ったことがあり何も出なかったと聞いている」との情報を得た。
- イ、昭和50年代前半、岩手県立博物館の建設準備室において石塔婆の展示用複製を製作するにあたり、石塔婆が動かされたことが推察されたが詳細は不明である。
- ウ、現在の場所が造立当初からの場所であったかは不明であるが、安永4年の風土記によると、所在の場所が「堂ヶ澤脇」とあり、地点としてみた場合大きな差異がないと考えられる。
- エ、石塔婆が建つ場所は、復旧建立のために地盤の安定性を考慮し、既存の角礫等を残して最低限の土層確認トレンチとした。

(2) 岩手県指定有形文化財「最明寺石塔婆」

1号碑（金剛界阿弥陀如来種子石塔婆）

塩と推定される白い粉状の付着物を布で拭き取り除去した（2号碑も同様）。

地中に埋没している部分に風化の著しい部分が見られる。また、層状に剥離の恐れが見られ、打診棒により空隙の確認ができた（2号碑も同様）。

2号碑（胎藏界阿弥陀如来種子石塔婆）

1号碑と同様の塩と推定される白い粉状の付着物を布で拭き取り除去した。基部の剥離損傷が大きかったため、岩手県教育委員会へ修理届を提出し、岩手県立博物館の指導を得て応急処置を行った。

石塔婆の復旧にあたっては、元の位置に建てる部分を中心に山砂を用いた。周囲の土は粘性が高く水分を含み易く、排出され難いことから、地表面からの水分が蒸散しやすくなることを想定した。また、石塔婆の南西側にある水槽からの流水の流れをよくするため、明渠の水路を拡張した。

指定文化財の保存管理上、今後も定期的な観察が必要であり、覆屋の設置維持、周囲の排水管理が保存管理上の大きな課題となる。

6 資料

(1) 『往古磐井郡花布佐石蔵山最明寺略縁起及旧跡左エ顕す』（千葉万治郎氏蔵）『門崎村史』より引用
抑当山者人皇四十四代之帝元正天皇御宇養老年中陸奥国司鎮守府將軍從三位兵部卿大野朝臣東人当郡牟婁峯山本宮権現建立関に当房村石蔵山には熊野大権現本地は閻浮檀金之弥陀薬師観音願成す右磐倉えは従往古石蔵坊に岩・・・坊・・・異人等僅之庵を結幾何年共齡不知徘徊す右異人共に社堂を為擁護置候処逐々年経世を隔間に飛去此間退転す干時人皇五十四代帝仁明天皇御宇嘉祥年中文選者慈覚丹仁大師之開基天台宗峯寿庵本尊毘沙門天運慶之御作該後人皇五十九代帝宇多天皇御宇寛平年中大江千里氣仙郡如意山金剛寺及び当山祈願所と奉迎後に人皇七十三代同七十四代堀河院鳥羽院兩帝之御宇為勅願と長治二年左少弁富任郷は関山中尊寺江御下奥羽之大守御館鎮守府將軍藤原清衡に仰て中尊寺建立並に当山修復中興を基衡御堂四面建替秀衡伽藍七間四面建立三代中興祈禱所と奉崇于時人皇八十二代之帝鳥羽院御宇文治五年源頼朝公悪党為御征伐御発向御供には下総国住人葛西壱岐守清重戦功数多にて下給其時泰衡為逆意八月二十一日追討平泉館焼亡す同九月三日泰衡出羽国北内郡にて郎徒次郎兼任討る于時右大将御帰陣に而奥州五郡を給牡鹿郡石巻日和山に御移後に登米郡寺池城に御居住至時当郡室根山新宮人皇九十六代花園院之御宇正和二年葛西刑部大輔清信公建立本山一之宮と奉守護当山者祈願所奉迎御寄進被附置其後最明寺入道時頼公日本御巡回之節休寓被成至最明寺と為改号該前は号蓮花谷と後天正十八年之乱に太閤秀吉御下知にて奥羽大小名御存無之御所領被召上自清重公十七代後胤清信公落城す自当太守公御糺無之当時悉退転す雖然境内守護而六所宮次に当て天満宮社良に当て荷当権現社離に当て薬師瑠璃光如来社関に震に山王堂社兌に山神宮社乾に当て白山権現之社孰旧跡構を守護不仍こ之縁記如件

<後略>

(2) 『寛永18年布佐風土記』（布佐鈴木徳司氏蔵）『門崎村史』より一部引用

一、磐井郡東山布佐村寛永拾八歳に度々御邑直し相成門崎村え入翌年本地竿入邑境東は千手堂前土手外根通り西は今不相川通り門崎村分に而経ヶ森通りす境而同処より松原越口すずね通り大石蔵外根通りすずね称伝に小石蔵坊主石梨し角より下り策ヶ沢北上川西磐井郡狐禅寺藤西は風見当に御座候然度元録年中御邑御改之砌御大官様御改之被或置候処御案内布佐之喜兵衛茂右エ門罷出候処右策ヶ

沢より布佐邑分入居小屋相立置右は石之甚内家内之者越置申候依而御邑境より内え小家相立居候間
払申度と三人の案内之者申上候得者扱又見れば至困窮者に相見得ふじはばきあみ渡世致躰し者如何
様之余慶切開等可仕哉用捨さし置可然と御代官様より被仰付無余儀相払不申さし置申候由に御座候
其後二十四五ヶ歳相過し享保年御邑境改在之御案内仕候処右甚内方より越居候喜兵衛と申者只今立
石と申度江各別布佐村分え入屋敷を立仕細等切開き住居罷在油断仕り右之次第被仕候石策ヶ沢より
二百七八十間も引込只今之立前沢策ヶ沢と名付御案内申上喜兵衛子共助右エ門代迄二三軒三軒居家
相立住居致候得共無是非払不申さし置申候而野山通りを格別被取申候由に御座候然度助右エ門子共
喜平治代に喜平治厩屋之後通用道平地に立石沢候相通申度段々三四度通を山え廻し上げ々々仕只今
は右之通畑に仕困登抜道に罷成申候然度立石前沢向すず称通御邑境之由拓と下相川之者一申者在之
由大きに心得違に御座候御郡絵図関御邑絵図に茂策ヶ沢と在之事に御座候段々布佐分之野山切取沢
迄取申義余り無理過に御座候元来門崎邑之砌御邑境布佐との境策ヶ沢に御座候其時の御邑境者西之
方作之瀬海道より下候戸し後通りより丑沢北上相川邑関羽境沢切に御座候由申伝に御座候布佐村南
之方境安代沢よりよしが沢狸が沢金取沢より北上川安代より向の方は川原脇より千手堂前古土手築
田之所土手の築始し処え見通に御座候北は松川邑境経ヶ森より大沢妻之神すず称水落通新田之下牧
田より段々すず称登り大川人館見付之由に御座候然度に御邑直り門崎村に罷成候而は右妻之神より
大沢通用通先歳万右エ門屋敷境より称作屋敷沖針山用水せきより向北平屋敷善十郎畑境より屋敷武
右エ門田境中沢屋敷弥右エ門田畑境通新屋敷長之助畑境袖ノ沢屋敷養吉畑境通り内野川え引通境に
御座候右境先歳松川村に入作牧田辺え人馬通用路在之其下通悪水抜大堀にて御座候処寛永歳中猿沢
洪水と申候水相出石砂沢山に押入段々埋申候而畑に至し作り居申候境も不相見得候様罷成申候松川
村え入作山屋敷兵六郎又太郎畑道通之下淵え境乱杭相立向後紛乱不仕よふ仕置申度と小舗屋敷茂右
エ門北ノ沢武左エ門役付肝入源三郎方え申遣御邑肝入組頭中立合境杭相立置以後悪水申説には通用
道下淵境より下にせき在之と覚え居申伝置心得違無之様にと申談境杭相立申候

<略>

一、布佐石蔵山西明寺往古石蔵石蔵山熊野大権現本地阿弥陀薬師観音別当天台宗石蔵山西明寺峯寿院
文撰慈覚大師開基二世右本地東栄山御末山なり人皇五四代帝仁明天皇御宇嘉祥歳中一なり大僧都文
堂三世亮海四世大阿闍梨法印亮専五世周海六世宮久七世清永八世証栄九世栄昌十世秀隋十一世亮全
十二世文山十三世信永十四世秀永十五世実元十六世天道十七世大阿闍梨蓮翁右蓮翁の桓武天皇之末
流秩父別当武基弟葛西武常末葉布佐伊与守嫡子なり開山文撰より十六世天道家督に立姓は平氏歳号
文明歳中系図は別に在り十八世大阿闍梨蓮山長子出雲清蓮長子形部胤清子治部清定長子喜兵衛重常
家督予八郎胤持右与八郎鬼木梅津次郎左衛門孫上惣右エ門弟を聲に取長子武右エ門家督庄之助清正
右庄之助は流日形村沼田千葉市郎右エ門弟を聲に取家督武左エ門重胤元来武老エ門嫡子なり家督武
右エ門清次右者先祖北形部孫喜兵衛姉賀四郎兵衛老名内記を五代目庄作次男武右エ門姉の木沢内匠
より六代目七内家督に夫婦親子三人参矣長子武左エ門大娘に聲を取跡二相立男子武右エ門家督に参
候

<後略>

一、石蔵山熊野権現本地弥陀、薬師、観音往古人皇五十四代帝仁明天皇御宇嘉祥歳中出羽奥州之大守
鎮守府將軍藤原清衡基衡秀衡三代建立修覆文治歳中泰平御退次に源元將軍頼朝公御発向御退次被成
跡えは元来下総国之住人葛西壱岐守清重公御供に而下り御帰陣之時奥州二而五郡被下牡鹿郡石巻日
和山城御写し跡に登米郡寺池城御住居折壁室根山大権現総鎮守一の宮に被成其外平泉中尊寺布佐石
蔵山西明寺社共に御修覆所と御座候然処天正十八年之比太閤秀吉公御下知に而出羽奥州大名小名

將軍御存じなく御知行被召上候迪清清重公より十七代目晴信公御落城其後当大守様御代相成俟而石蔵山熊野大権現御糺無御座荒社に相成居候処元和元丙申歳石蔵山併西明寺伽藍千手堂之観音堂一同回録なり少之堂に立替置荒果置申候

<後略>

一、寛政六歳之頃山林御役人小原作右エ門様と朴ノ木沢ノ又兵エ案内に而西明寺入之岩穴をくぐり右之一町に而地在るか己ら一枚見付持参仕候 右は西明寺伽藍往古之屋根は瓦に在哉と申夏に而小原作右エ門様硯石に致し御持被成候外に往古よりかはり事なく一人もけが致し候者伝なし獸或は蛇類住之ないと申夏もなし不思議之名所に在なり

一、西明寺寺中蓮清壇と申所往古布佐伊予之墓中頃より南下り西明寺世代当時迄三〇代斗にも在哉右蓮清壇中より北之方続て石塔在文字余になし何茂梵字斗河ノ一本徳治三年二月ありせき淵中沢加賀之墓之内永仁二年下申在有薬師堂え通る道之脇に石塔二本あり是も梵字あり銘に秀衡夫婦の多め者一本父母の為二親二とあり伝に鈴木兄弟之石塔と申也文治五年源義経公高館落城と哉石塔に者建長三歳と在文治より七八十年斗後之夏にあり見合鈴木兄弟之孫共にても最明寺え供養に相立もやとも伝ふ分明にあり

一、西明寺本尊往古阿弥陀如来雲慶作毘沙門同作地藏同作之由之候処弥陀如来往古四国より廻国六部参盗今は四国に在と申伝地藏は安永年中何者にか被盜取候哉失而なし今に毘沙門斗残り色々小仏もたからず数体今まあり

一、西明寺宝物に古かめ在是い享保年中之頃石蔵山小石蔵と西所石津か今下相川喜平治祖父之代一季に住候故に相之一候一右津加を堀見はかめ一つ大切三こし阿利夫はなべつるの様に朽候ものに之一候西明寺庵宝之内江納置候が天明年中何者か持参仕候か失てなし今にかめ斗阿利是は何百年先と申夏知るものなしどうでも新羅国より渡りものかと申者もあり五六百年先中ごろ伽藍建替之砌飛驒之國大工之折候戸棚一二枚在元和歳中廻録之時本尊仏と戸二枚焼残り候と申伝にあり熊野大権現社に戸びら二枚残り在り一枚寛政年中何者か盜取失て今は一枚阿利

一、西明寺別当の社地石蔵権現薬師山王宮白山宮天神宮荷渡権現都合六社あり

<後略>

※引用にあたっては、一部本文中の訂正を行っている。所蔵者名は門崎村史刊行時のものである。

(畠山)

【参考文献】

- 石巻文化センター 1991『企画展 北上川下流域の板碑』
- 石巻市史編さん委員会1992「石巻の歴史第六巻特別史編」石巻市
- 岩手県教育委員会1986『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集
- 岩手県立博物館2016『前平泉文化関連遺跡調査報告書第33冊』公益財団法人岩手県文化振興事業団50-57頁、94-96頁.
- 岩手県教育委員会2000「岩手県の洞穴遺跡」岩手県文化財調査報告書第106集
- 株式会社長谷地質調査事務所1981「北上川流域地質図（二十万分之一）説明書」
- 加藤正久1996『石仏偈頌事典』国書刊行会（第2刷）
- 角川春樹1985『角川日本地名大辞典3 岩手県』「角川日本地名辞典」編集委員会
- 門崎村史編纂委員会1956『門崎村史』門崎村
- 川崎村教育委員会1982『川崎村の主な仏像』川崎村文化財調査報告書
- 川崎村教育委員会1984『川崎村石造文化財 第1部 石塔婆（板碑）』川崎村文化財調査報告書第5集
- 川崎村文化財調査委員長山形薫1986「伝承の川崎 史蹟の探訪」川崎村教育委員会
- 小林文夫1990「川崎村の歴史」（岩手県文化財愛護協会）熊谷印刷出版部
- 狭川真一1995「平泉型宝塔について」『岩手考古第7号』岩手考古学会
- 司東真雄1960「黄海村の古碑」『黄海村史』黄海村史編纂委員会 岩手県藤沢町役場
- 司東真雄1985『岩手の石塔婆』(株)モノグラム社
- 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006「河崎の柵擬定地発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第474号
- 畠山篤雄1999「第7章第2節 板碑」『千厩町史第1巻歴史編』千厩町
- 畠山篤雄2001「平泉周辺の板碑—無紀年銘板碑について—」『中世奥羽と板碑の世界』高志書院
- 畠山篤雄2010「磐井郡の板碑—有紀年銘板碑を中心として—」『一関市博物館研究報告第15集』
- 畠山篤雄2018「磐井郡板碑の基礎的検討」『一関市博物館研究報告第21集』
- 平泉研究の資料学的再構築石造物班2018『平泉周辺石造物集成』科学研究費基盤（B）『平泉研究の資料学的再構築』研究代表者柳原敏昭東北大学大学院教授
- 宮城縣史編纂委員会1987『宮城縣史復刻版27（資料編5）』

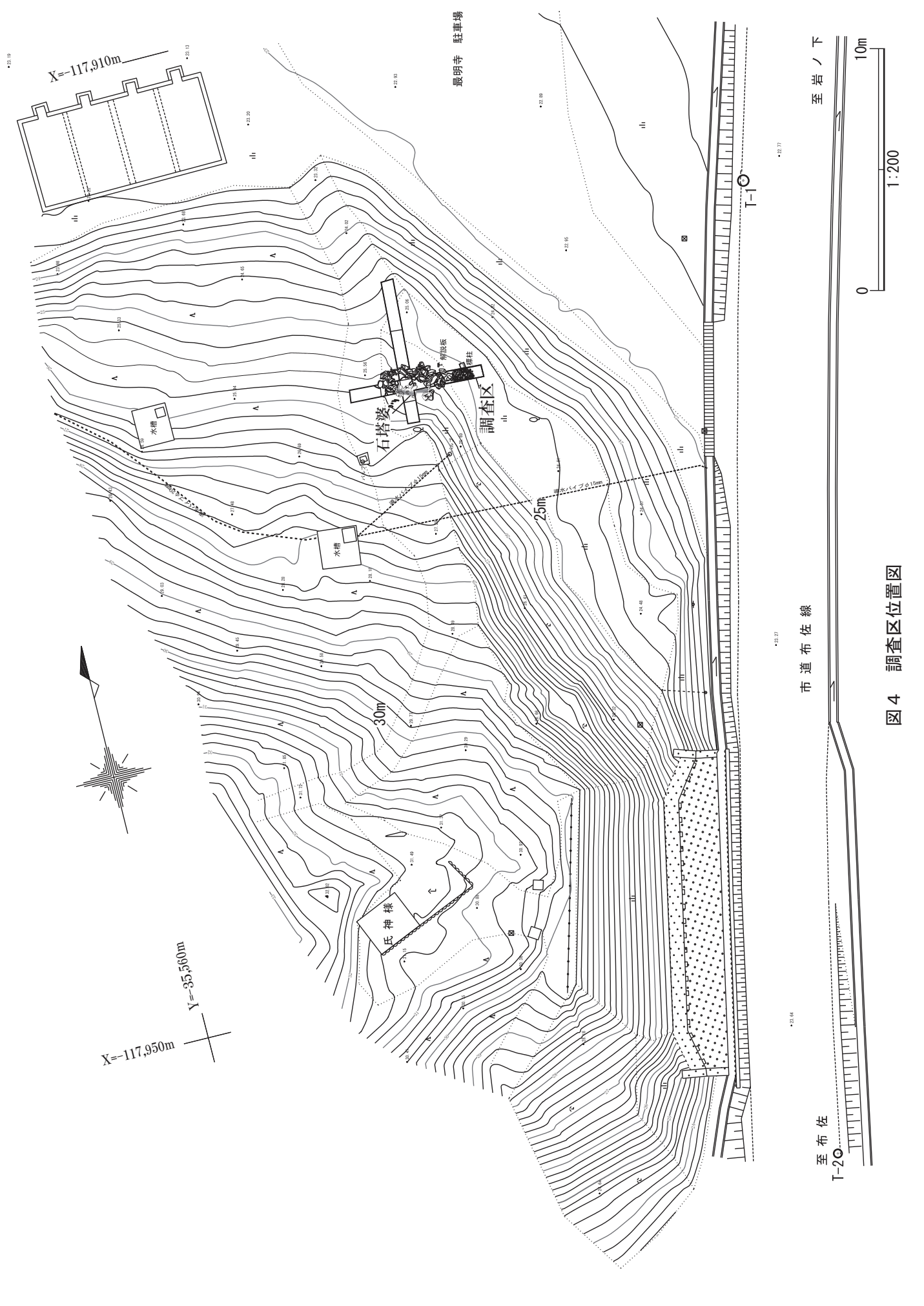


図4 調査区位置図

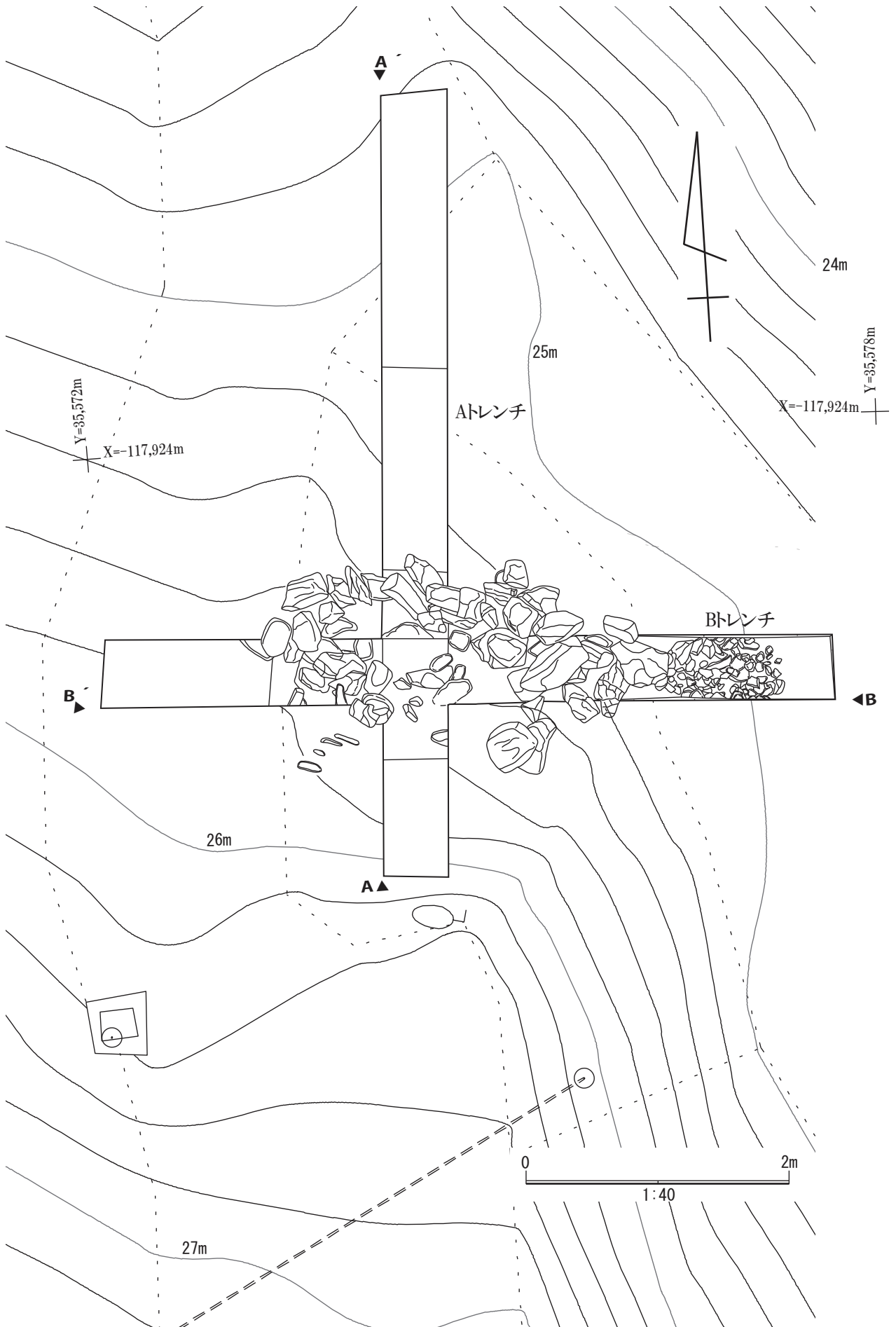
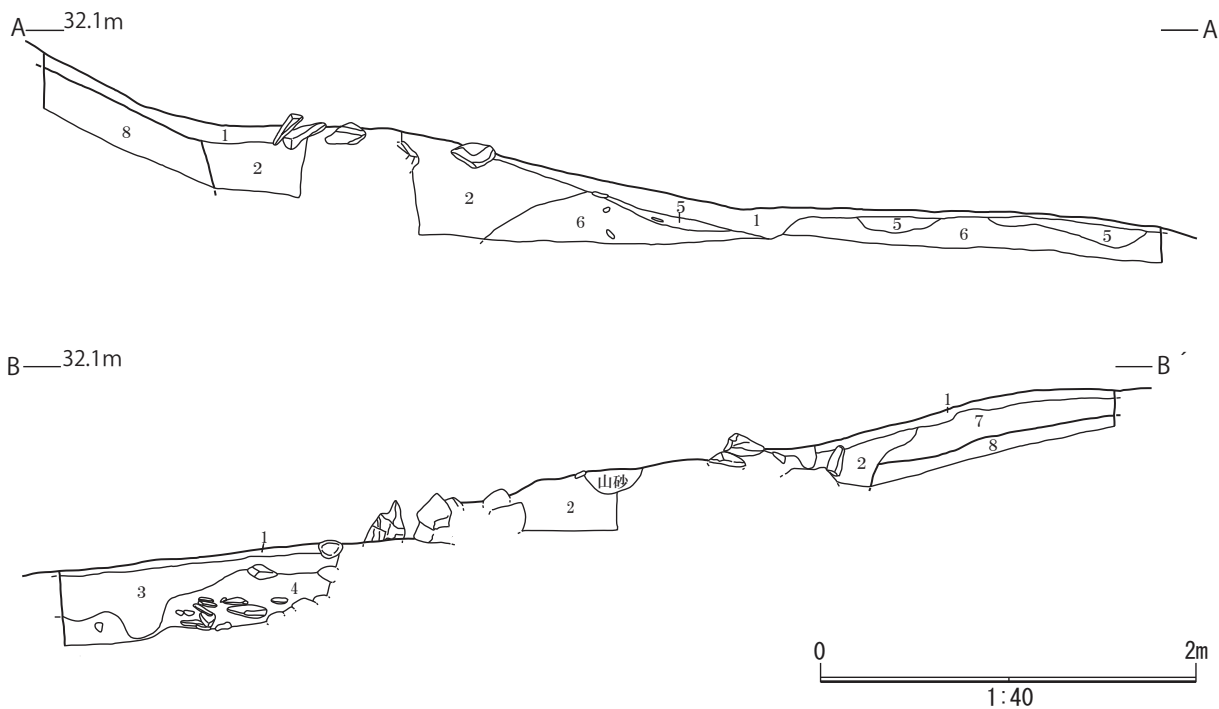


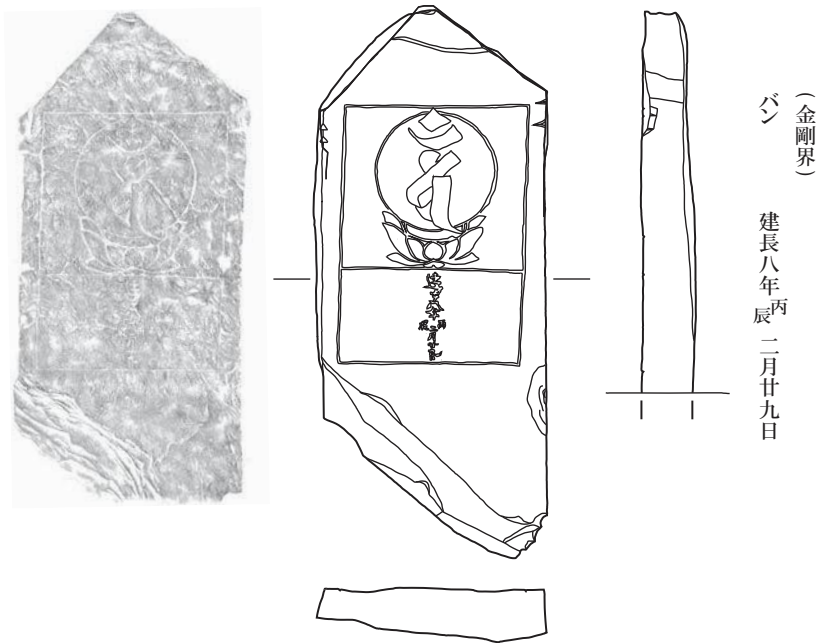
図5 調査区平面図



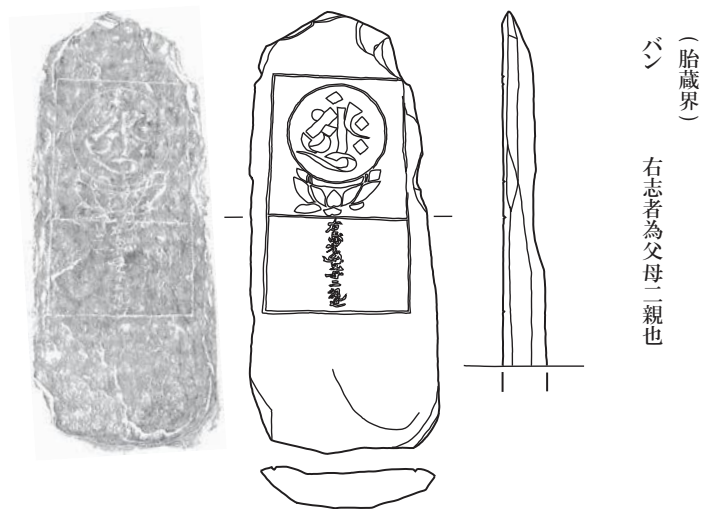
土層注記

- 1 10YR3/3暗褐色粘土質シルト。粘性ややあり。しまりやや弱。木の根を多量に含む。腐植土。表土。基本土層 I 層。
- 2 10YR4/4褐色粘土質シルト。粘性強。しまりやや弱。明瞭な混入物なし。石塔婆の据え方を掘り返した層か(時期不明)。
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト。粘性中。しまりきわめて強。第6層の小・中ブロックやや多く径3~5cmの礫を微量含む。造成層か(時期不明)。
- 4 10YR3/4暗褐色粘土質シルト。粘性ややあり。しまり極めて強。石塔婆の据え方に西接する石積状の部分の上に乗る。小型の扁平なる石を水平に積み重ねている。下部に長軸5~30cm大の礫を極めて多量に含む。造成層か(時期不明)。
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト。粘性なし。しまり極めて強。径1~3cmの礫を少量含む。
- 6 10YR4/6褐色粘土質シルト。粘性中。しまり極めて強。明瞭な混入物無し。地山粘土質土が造成時(時期不明)に大きく動かされた可能性が高い。
- 7 10YR4/4 褐色粘土質シルト。粘性やや強。径1~3cmの礫を少量、長軸5~10cm大の礫を微量含む。
- 8 10YR4/4褐色粘土質シルト。粘性強。しまり強。長軸5~10cm大の礫を微量含む。地山。基本土層 II 層。

図6 土層断面図



1 金剛界大日如来種子石塔婆(1号碑)



2 胎藏界大日如来種子石塔婆(2号碑)

※側面図は石塔婆の下部を埋設した状態で実測。

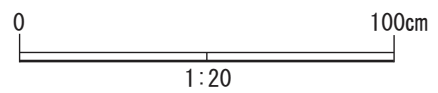


図7 最明寺境内石塔婆(1)



バン
永仁二年丙申十月廿日
施主敬白

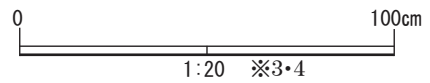
3 金剛界大日如来種子石塔婆



キリークサク
サ
徳治三年戊申三月十八日

※拓本は川崎村(1984)から補正の上転載。

4 阿弥陀三尊種子石塔婆



サク (勢至菩薩)
妙
□皆是國圍
□禪尼
□生死滅
□无□

5 勢至菩薩種子石塔婆

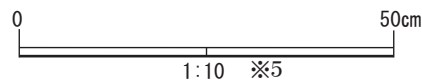


図8 最明寺境内石塔婆(2)

番号	名称	紀年銘	西暦	種子	彫り方	偈頌	願文等	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	石材	備考
1	金剛界大日如来種子石塔婆	建長八年二月廿九日	1256	バン(金)	薬研彫			144.5	61.5	15	粘板岩	双式碑1号碑 岩手県指定
2	胎藏界大日如来種子石塔婆			バン(胎)	薬研彫		右志者為父母二親也	117.5	48	12	粘板岩	双式碑2号碑 岩手県指定
3	金剛界大日如来種子石塔婆	永仁四年丙申十月二十九日	1296	バン	薬研彫		施主敬白	144	53	14.8		「二二」と彫る 「四」と読む
4	阿弥陀三尊種子石塔婆	徳治三年戊申三月十八日	1308	キリーク、サ、サク				180.2	57.5	21	粘板岩	倒伏
5	勢至菩薩種子石塔婆			サク	薬研彫	一切諸法皆是國圍 □禪尼 □生死滅 □无□	妙□禪尼	63	21	13		
6	金剛界大日如来種子石塔婆	延慶二年3月18日	1309	バン								所在不明報告
7	種子不明石塔婆	延慶三年12月	1310									所在不明報告
8	石塔			バン(金)	薬研彫			44.1	34.6	32.1	凝灰岩	平泉型石塔二面にバン

表2 最明寺境内中世石造物一覧表(「最明寺石塔婆」を含む)

番号	名称	紀年銘	西暦	所在地	石材	その他	備考
1	最明寺石塔婆	建長8年丙辰2月29日	1256	一関市川崎町門崎字石蔵	粘板岩	県指定	双式碑
2	積善院墓地大日如来板碑	文永9季壬申11月29日	1272	西磐井郡平泉町平泉字衣関	溶結性凝灰岩	頭部△額	
3	峯ノ葉師堂山(金)大日如来種子板碑	弘安3年	1280	西磐井郡平泉町平泉字衣関	凝灰岩?		
4	竜沢寺石塔婆	弘安4年8月日	1281	一関市中里字沢田	井内石	市指定	大日、釈迦、阿弥陀如来
5	志羅山家墓地阿弥陀如来種子板碑	弘安7年12月下旬	1284	西磐井郡平泉町平泉字志羅山		毛越寺	(白王院)
6	峯ノ葉師堂山(胎)大日如来種子板碑	弘安8年11月6日	1285	西磐井郡平泉町平泉字衣関			所在不明
7	平泉要害金剛界五仏種子板碑	正応4年11月21日	1290	西磐井郡平泉町平泉字要害	溶結性凝灰岩		要害八幡神社
8	下谷起阿弥陀三尊種子板碑	正応5年8月6日	1291	一関市弥栄字下谷起	井内石		阿弥陀、観音、勢至。
9	月館大師堂(金)阿弥陀如来種子板碑	永仁2年甲午6月8日	1294	西磐井郡平泉町長島字月館	凝灰岩(硬質)カ	破損補修	大師堂2号
10	月館大師堂(金)阿弥陀如来種子板碑	紀年銘なし		西磐井郡平泉町長島字月館	凝灰岩(硬質)カ	9とほぼ同時期	大師堂1号(拜殿西側)
11	月館大師堂(金)阿弥陀如来種子板碑	紀年銘なし		西磐井郡平泉町長島字月館	凝灰岩(硬質)カ	9とほぼ同時期	大師堂3号
12	最明寺大日如来種子板碑	永仁4年丙申10月29日	1296	一関市川崎町門崎字石蔵			
13	平泉要害金剛界大日如来種子板碑	正安元年10月26日	1299	西磐井郡平泉町平泉字要害	溶結性凝灰岩		要害八幡神社
14	種子不明板碑	正安元年	1299	西磐井郡平泉町平泉字泉屋			個人宅
15	老松観音堂種子不明板碑	乾元	1302 ~03	一関市花泉町老松字水沢屋敷		拓影残	所在不明
16	老松観音堂大日如来種子板碑	乾元2年	1303	一関市花泉町老松字水沢屋敷			
17	峯ノ葉師堂山(金)大日如来種子板碑	嘉元2年10月24日	1304	西磐井郡平泉町平泉字衣関			所在不明
18	葛西家墓地虚空蔵菩薩種子板碑	徳口(徳治カ)	1306 ~08	一関市川崎町門崎字銚子		蔓生寺跡	所在不明
19	最明寺阿弥陀三尊種子石塔婆	徳治3戊申3月28日	1308	一関市川崎町門崎字石蔵	粘板岩	最明寺墓地	阿弥陀、勢至、観音
20	山目種子不明板碑	延慶2年2月	1309	一関市山目			所在不明
21	最明寺金剛界大日如来種子板碑	延慶2年3月18日	1309	一関市川崎町門崎字石蔵			所在不明
22	松の森お伊勢堂阿弥陀如来種子板碑	延慶3年9月18日	1310	一関市花泉町日形字松の森		お伊勢堂境内	
23	最明寺種子不明石塔婆	延慶3年12月	1310	一関市川崎町門崎字石蔵			所在不明
24	黄海二日町阿弥陀如来種子板碑	正和口年11月8日	1312 ~16	一関市藤沢町黄海字天堤	粘板岩		
25	老松観音堂種子不明板碑	正和元年9月8日	1312	一関市花泉町老松字水沢屋敷			所在不明
26	大乘院藤里家墓地(胎)大日如来種子板碑	正和元年9月22日	1312	西磐井郡平泉町平泉字毛越			
27	志羅山種子不明板碑	正和3年4月20日	1314	西磐井郡平泉町平泉字志羅山			
28	萩萩秋葉山(胎)大日如来種子板碑	正和3年9月日	1314	一関市萩萩字江川南方		秋葉神社境内	
29	金森中屋敷種子不明板碑	正和4年8月時正	1315	一関市花泉町花泉字金森			
30	王壇出土種子不明板碑	正和5年10	1316	一関市花泉町老松字藤田	粘板岩		断片、出土資料
31	達谷窟阿弥陀如来種子板碑	文保元年	1317	西磐井郡平泉町平泉字北沢	粘板岩	達谷窟境内	
32	葛西家墓地(胎)大日如来種子板碑	文保2年2月21日	1318	一関市川崎町門崎字銚子	粘板岩	出土資料	所在不明
33	松柏山公葬地阿弥陀三尊種子板碑	元応2年2月25日	1320	一関市藤沢町黄海字本沢	粘板岩		阿弥陀、観音、勢至。
34	元応二年金剛界成身会種子曼荼羅石塔婆	元応2年卯月中旬	1320	一関市花泉町花泉字上北浦	粘板岩	市指定	
35	志羅山阿弥陀如来種子板碑	元応3大才辛酉年4月3日	1321	西磐井郡平泉町平泉字志羅山	溶結性凝灰岩カ		
36	五輪堂種子不明板碑	元亨口 2月17日	1321 ~24	一関市花泉町涌津字五輪堂			所在不明
37	大乘院藤里家墓地五輪塔線刻板碑	元亨2年壬戌9月10日	1322	西磐井郡平泉町平泉字毛越			
38	弥勒菩薩種子石塔婆	元亨2年壬戌10月6日	1322	一関市川崎町薄衣字古館	粘板岩		玄光寺跡出土
39	黄海山谷阿弥陀三尊種子板碑	元亨3年6月4日	1323	一関市藤沢町黄海字鍛冶屋敷	粘板岩	角柱状	正面 阿弥陀、観音、勢至。右面 ウーン、ア。左面 パン、ア
40	正中二年阿弥陀種子石塔婆	正中2年6月30日	1325	一関市花泉町老松字藤田	粘板岩	市指定	
41	王壇種子不明板碑	嘉暦2年7月9日	1327	一関市花泉町老松字藤田			所在不明
42	満昌寺大日如来種子板碑	嘉暦3年8月27日	1328	一関市花泉町油島字檀傳沢	粘板岩		満昌寺境内より出土
43	満昌寺阿弥陀如来種子板碑	嘉暦3年11月5日	1328	一関市花泉町油島字檀傳沢	粘板岩		満昌寺近隣水田より出土
44	毛越寺(金)大日如来種子板碑	嘉暦第4己巳3月20日	1329	西磐井郡平泉町平泉字毛越			
45	亥閉館種子不明板碑	元徳2年3月23日	1330	一関市花泉町涌津字亥閉館			詳細不明
46	伝金堤寺跡種子不明板碑	元徳4年壬申6月27日	1334	一関市花泉町老松字館平			
47	伝如来寺跡普賢菩薩・不動明王種子板碑	元徳4年大才壬申8月彼岸第三番	1334	一関市川崎町薄衣字上段			所在不明
48	釈尊院墓地阿弥陀如来種子板碑	紀年銘なし		西磐井郡平泉町平泉字衣関	凝灰岩?	釈尊院墓地	重要文化財「釈尊院五輪塔」(仁安四年)右側

※本表は、平成29年12月に平泉町において開催された「平泉研究の最前線—資料学からのアプローチ—」主催：科学研究費補助金基盤研究（B）「平泉研究の資料学的再構築」（研究代表者：柳原敏昭東北大学教授）のシンポジウムにおいて畠山が発表した「平泉周辺の板碑」資料を基本に、その後誤記等内容の一部訂正名称の訂正を行い、再編改訂したものである。その後発見された板碑を追加した。
※名称中（金）は金剛界、（胎）は胎藏界である。

表3 磐井郡（一関市・平泉町）の紀年銘板碑（鎌倉期）＜年号順＞



1 最明寺・石蔵山遠望（東から）



2 石蔵山最明寺本堂



3 指定有形文化財「最明寺石塔婆」調査前覆屋



4 平成28年3月応急処置状況①



5 平成28年3月応急処置状況②



1 平成28年3月応急処置状況③



2 平成28年3月応急処置状況④



3 調査前①



4 調査前②



5 覆屋を外した状況①



6 覆屋を外した状況②



7 石塔婆の背面状況



8 石塔婆・覆屋移動後の作業



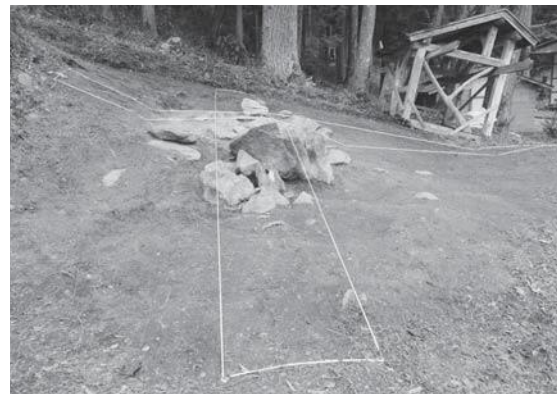
1 石塔婆・覆屋移動後 西→北



2 石塔婆・覆屋移動後 北→西



3 トレンチ設置状況①



4 トレンチ設置状況②



5 石塔婆記録作業



6 トレンチ調査作業風景



7 上部集石状況①北→西



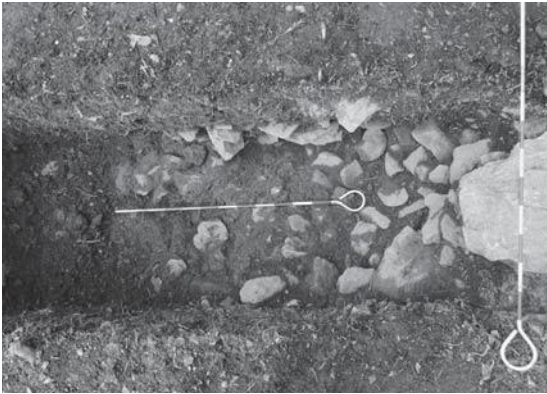
8 上部集石・鎌刃出土状況



1 トレンチ完掘状況 西→東



2 Aトレンチ 西→東(上部集石)



3 Bトレンチ東側



4 Bトレンチ西側(南断面)



5 Aトレンチ西側 東→西



6 Aトレンチ北側 東→西



7 Aトレンチ東→西



8 Aトレンチ北側 東→西



1 上部集石



2 下部集石



3 磁器片出土状況



4 復旧作業



5 復旧石塔婆



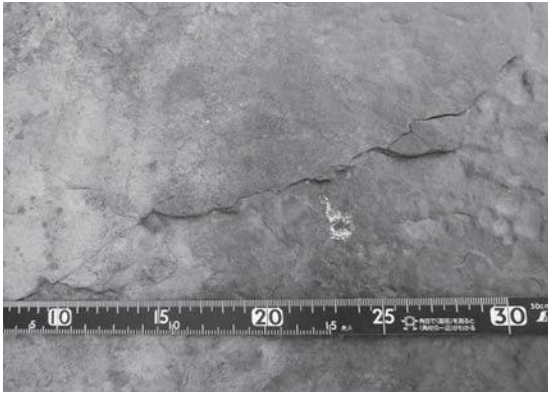
6 復旧石塔婆背面



7 復旧石塔婆正面



8 覆屋背面



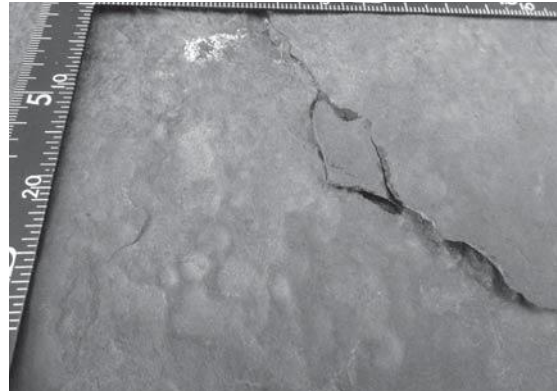
1 剥離部分の保存処置①



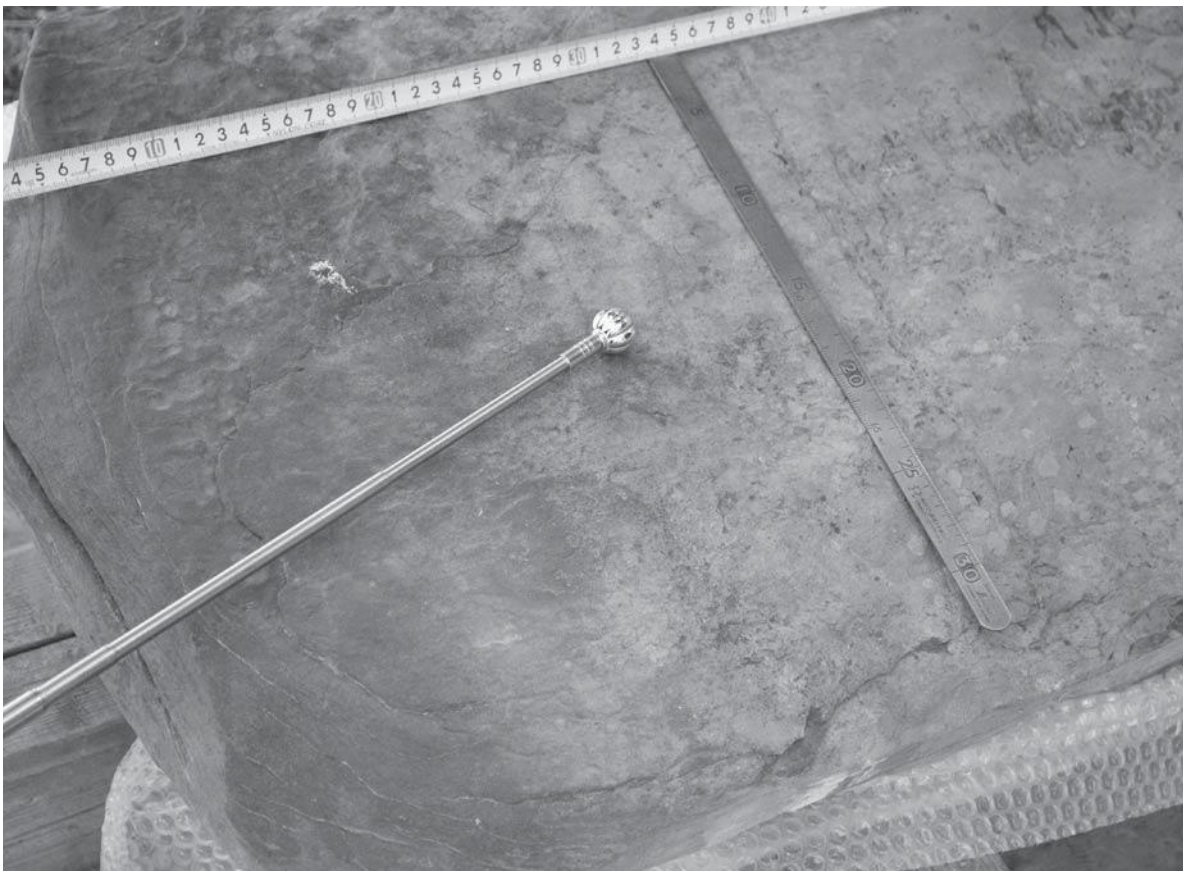
2 剥離部分の保存処置②



3 剥離部分の保存処置③



4 剥離部分の保存処置④



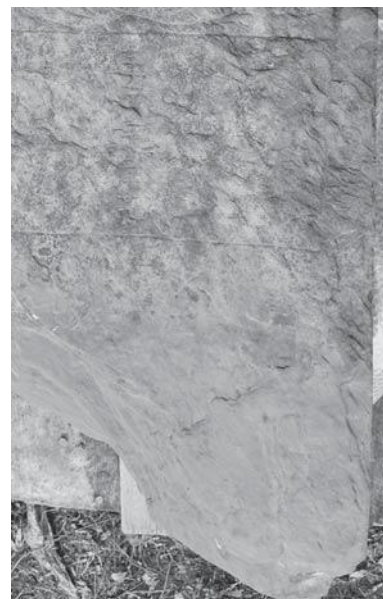
5 打診棒による確認(2号碑基部)



1 1号碑

異音が
認められた箇所

著しい異音が
認められた箇所



2 1号碑基部



3 2号碑

著しい異音が
認められ、
空隙が見られ、
剥離が進んでいる



4 2号碑基部底面



1 調査完了後復旧覆屋 正面



2 復旧覆屋 左側面



3 復旧覆屋 右側面



4 正面遠望



5 排水路開渠整備状況



1 1号碑



2 1号碑拓影



3 1号碑背面



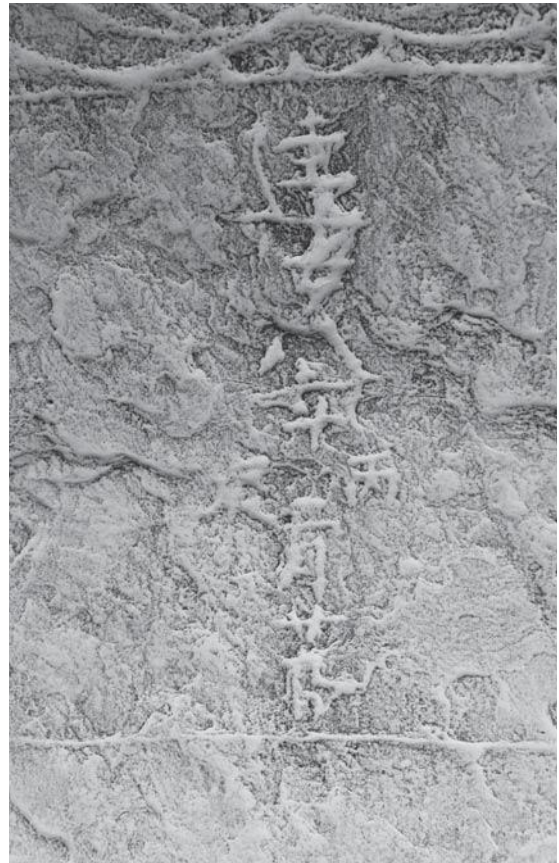
4 羽刻み(右方)



5 羽刻み(左方)



1 1号碑上区 種子・蓮座



2 1号碑下区紀年銘



3 1号碑右方 羽刻み



4 1号碑左方 羽刻み



1 2号碑



2 2号碑拓影



3 2号碑背面



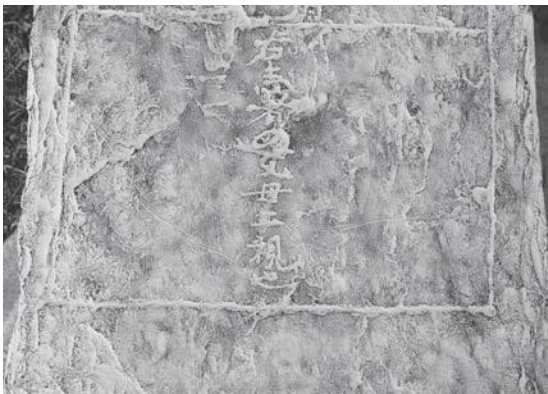
4 2号碑部分



1 2号碑上区 種子・蓮座 拓影



3 2号碑頭部



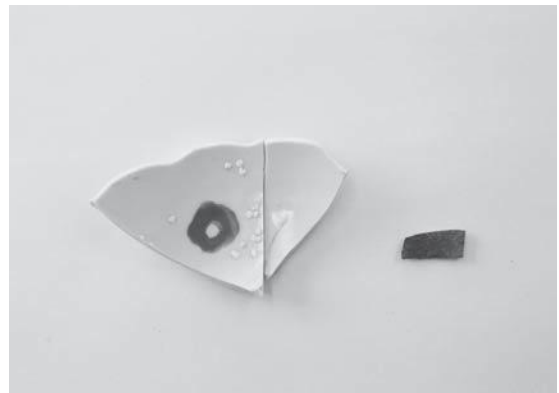
2 2号碑下区 願文 拓影



4 2号碑右方羽刻み



5 陶磁器外面



6 陶磁器内面



7 鎌刃(表)



8 鎌刃(裏)



1 最明寺境内墓地斜面に建つ石碑群



2 墓地斜面の石塔婆群



3 倒伏の徳治三年銘阿弥陀三尊種子石塔婆



4 墓地斜面の石塔婆群(部分)



5 墓地斜面の石塔婆群(部分)



6 墓地斜面の石塔婆(部分)



1 勢至菩薩種子石塔婆



2 勢至菩薩種子部分



4 永仁四年大日如来種子石塔婆



3 偈頌部分



5 平泉型宝塔



6 同部分

2. 猫館遺跡

1 遺跡の位置と地理・歴史的環境

猫館遺跡は一関市大東町曾慶字猫館の丘陵上にあり、中世の城館跡と考えられている（大東町教育委員会1994）（図9）。

調査地点は、一関市大東町曾慶字猫館69-3である（図10）。現地形では25m×40m程の概ね長方形の平場の北西部にあり、標高は約160mである。この平場は北端と東端を市道によって壊されており、道路との比高差は2～4mある。平場の北西部には土塁があり、長さ34m、最も高い部分で基底部から約1.6mである。また、南西部には高まりがあり、頂部に氏神を祀る祠がある。

ここは通称「タテ」と呼称されており、畠山氏が屋敷を構えていたが、明治末期に火災により平場を降りてすぐ南の土地に移転したといい、その屋号は「上の台」である。畠山氏の先祖は、摺沢村源八に居住する菊池氏の先祖である菊池三郎重頼の弟彦四郎重成と伝えられ、『藤原姓菊池家系図』に以下の記述がみられる。

「重頼 菊池三郎

始曾慶村の内猫館上の台に住居す、右猫館の畑山は我直弟なり。本国にて畑山大作の嗣子と為すと儀の故、苗字は別段の事なれども我弟也。」

系図によれば、菊池兄弟が猫館に居住していたのは14世紀頃である。

2 調査に至る経緯

平成30年6月14日、猫館遺跡内での個人住宅新築工事を目的とした試掘調査依頼書が、当教育委員会に提出された。これを受けて、6月28日に試掘調査を実施したところ、柱穴とみられる遺構を確認した。施主との協議の結果、工事箇所の変更はできず遺跡の破壊は免れないとの結論に達した。そこで、7月3日付けで文化財保護法第93条に基づく届出の提出を受け、7月5日付け教文第04004号文書により発掘調査を指示し、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。

調査地点の現況は畑である。住宅建築に伴い掘削を受ける範囲全てを調査区とし、重機を用いて耕作土を除去後、遺構の確認を行った。平面図はトータルステーションを用いて作成した。写真撮影は、デジタル一眼レフカメラを用いた。

現地での調査期間は平成30年7月9日から8月23日、調査面積は108.4㎡である。

利用した測量基準杭の成果（世界測地系第X系）は、以下のとおりである。

基G1 X = -112,652.849、Y = +45,862.214

基T5 X = -112,615.344、Y = +45,876.043

基P15 X = -112,618.928、Y = +45,878.054、H = 159.200

3 調査結果

(1) 基本土層

I層 10YR3/3暗褐色シルト。砂質分を多く含む。炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。耕作土層（図12-21層）。

II層 10YR6/4にぶい黄橙色シルト。砂質分、マンガング粒を多く含む。粘性あり。硬くしまる。地山層（図12-30層）。

(2) 遺構

掘立柱建物 1

調査区南東部の地山層上面で掘立柱建物を構成する P21・6・24・7・8・29・11の7基の柱穴を確認した(図11、写真図版4)。南北4間10.5m以上、東西1間2.8m以上とみられる建物で、調査区の南東外にさらに延びる可能性がある。南北の柱間尺は北から2.8m・2.8m・2.0m、2.9m、東西の柱間尺は2.8mである。軸方向はN-41°Eである。柱穴は円形で直径は大きいもので約0.6mあり、底面レベルは標高158.2m～158.9mとばらつきがある。確認面からの深さは最も深いもので0.6m程である。P6・24・7・8・29では柱痕跡を確認した。

P8・29・11を土坑1の底面で確認したことから、この建物は土坑1より古い。また、建物範囲は掘立柱建物2と重複するが、柱穴の切り合いがないため、新旧は不明である。柱穴埋土からの出土遺物はなく、年代は不明である。

掘立柱建物 2

調査区北西部の地山層上面で掘立柱建物を構成する P16・17・22・3・20の5基の柱穴を確認した(図11、写真図版4・5)。南北2間6.2m以上、東西1間2.7m以上とみられる建物で、調査区の東外にさらに延びる可能性がある。南北の柱間尺は北から3.6m・2.6m、東西の柱間尺は2.9mである。軸方向はN-41°Eで掘立柱建物1と同じである。柱穴は概ね円形で直径は大きいもので約0.6mあり、底面レベルは標高158.7m～158.9mと概ね揃う。確認面からの深さは最も深いもので0.3m程である。P16・17では柱痕跡を確認した。

建物範囲は掘立柱建物1と重複するが、柱穴の切り合いがないため、新旧は不明である。柱穴埋土からの出土遺物はなく、年代は不明である。

土坑 1

調査区南西部の地山層上面でその一部を確認した(図11、写真図版6・7)。そのほとんどは調査区外に拡がるとみられ、全体形は不明であるが、南北5.9m以上、東西4.6m以上で、深さは最深で1.0m以上あり、壁は緩やかに立ち上がる。壁の上端より2.0～2.8m内側に、P9・10・15・30・27の5基の柱穴を確認した。断面の観察から、これらの柱穴は土坑の埋土下層を埋め戻した後に掘り込まれたとみられ、その埋土は土坑の埋土上層と一体化している(図12-断面図M)。柱穴は円形で直径は大きいもので約0.7mあり、確認面からの深さは最も深いもので1.0m以上ある。P9・10・15では柱痕跡を確認した。埋土はにぶい黄褐色～暗褐色シルトに地山塊が混じるしまりのある土層で形成され、最上層では壁の上端より1.0程内側に径0.2m程の平たい石が集中していた。

掘立柱建物1より新しいが、出土遺物はなく、年代、性格は不明である。

(3) 出土遺物 (写真図版8・9)

全体では国産陶磁器14点、土師器の可能性のある土器の細片2点、加工が施された可能性がある石2点が出土し、その全てを表に記載した(表4)。全て遺構外からの出土である。

国産陶磁器は、全て近世以降のものであり、その内確実に近世に属するものは2点のみである。11が18世紀の肥前産陶器皿で、17が18世紀末の瀬戸産陶器皿である。1・3・13・18は同一個体の可能性があり、近世～近代の産地不明の甕であるが、その胎土は粗く砂粒が多く入り、成形時の継ぎ目で剥離している。

その他、地権者の畠山氏より、調査地点周辺で表土採取して保管していたという陶磁器数点を拝見したところ、その中に17世紀末から18世紀の肥前産磁器皿を確認した(写真図版9-1)。

4 まとめ

猫館遺跡の内、土塁のある平場を調査した結果、掘立柱建物2棟と柱穴を有する性格不明土坑1基を確認した。これらの遺構の年代は不明である。

当地点は「タテ」と呼称され、畠山氏が中世から居住したと伝えられていることから、その年代に人が生活していた可能性が高い。今回出土した遺物の中に中世のものは確認できなかったが、今後出土する可能性はあるだろう。

(二階堂)

No.	図版	地点・遺構名	層位	種類	器種	部位	年代	備考
1	8-2-1、8-3-1	攪乱溝	埋土	陶器	甕	胴	近世～近代	産地不明 成形時の継ぎ目で剥離
2		調査区西壁	I層	土師器か	不明	不明	古代か	磨滅激しい
3		攪乱溝	埋土	陶器	甕	胴	近世～近代	産地不明 成形時の継ぎ目で剥離
4		調査区西壁	I層	土師器か	不明	不明	古代か	磨滅激しい
5		調査区西壁	I層	陶器	土瓶	口	19C	大堀相馬か
6		攪乱溝	埋土	磁器	皿か		19Cか	肥前か 焼き継ぎあり
7		攪乱溝	埋土	石	不明	不明	不明	表面を研磨している可能性あり
8		攪乱溝	埋土	陶器	土瓶	底か	19C	大堀相馬か
9		鎮守付近	表土採取	磁器	猪口	口～体	明治以降	
10		調査区西端	I層	陶器	土瓶	底	19C	大堀相馬か
11	8-2-2、8-3-2	調査区西端	I層	陶器	皿	底	18C	肥前 陶胎染付
12		調査区西端	I層	磁器	皿	底	19後～20C	
13		クリーニング時		陶器	甕	胴	近世～近代	産地不明 成形時の継ぎ目で剥離
14		攪乱溝	埋土	石	不明	不明	不明	表面を研磨している可能性あり
15		攪乱溝	埋土	陶器	甕か	胴	近世～近代	産地不明
16		攪乱溝	埋土	磁器	皿か		近世か	産地不明
17	8-2-3、8-3-3	攪乱溝	埋土	陶器	皿	体	18末	瀬戸
18		攪乱溝	上面	陶器	甕	胴	近世～近代	産地不明 成形時の継ぎ目で剥離

表4 出土遺物観察表

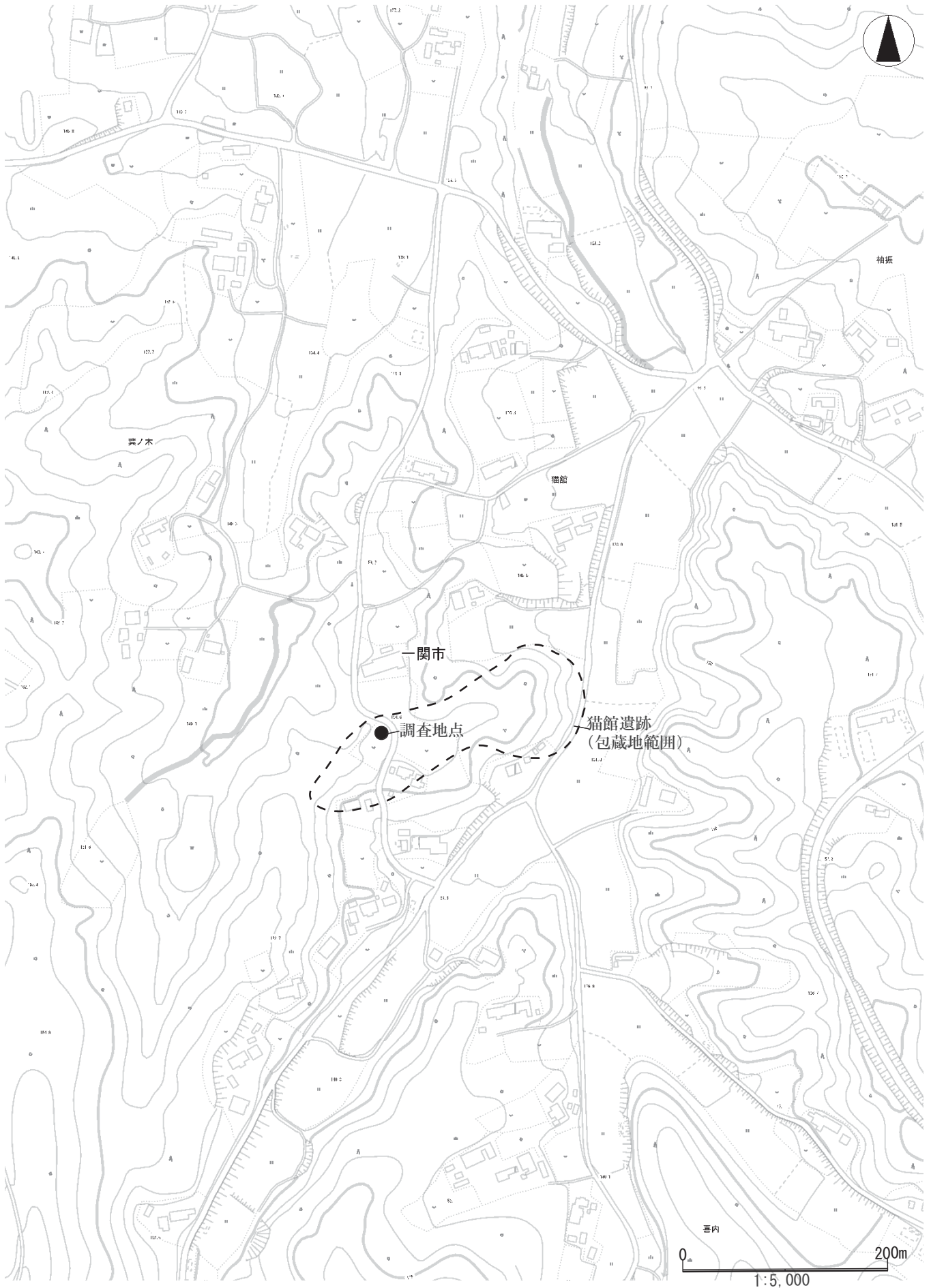


図9 調査地点位置図

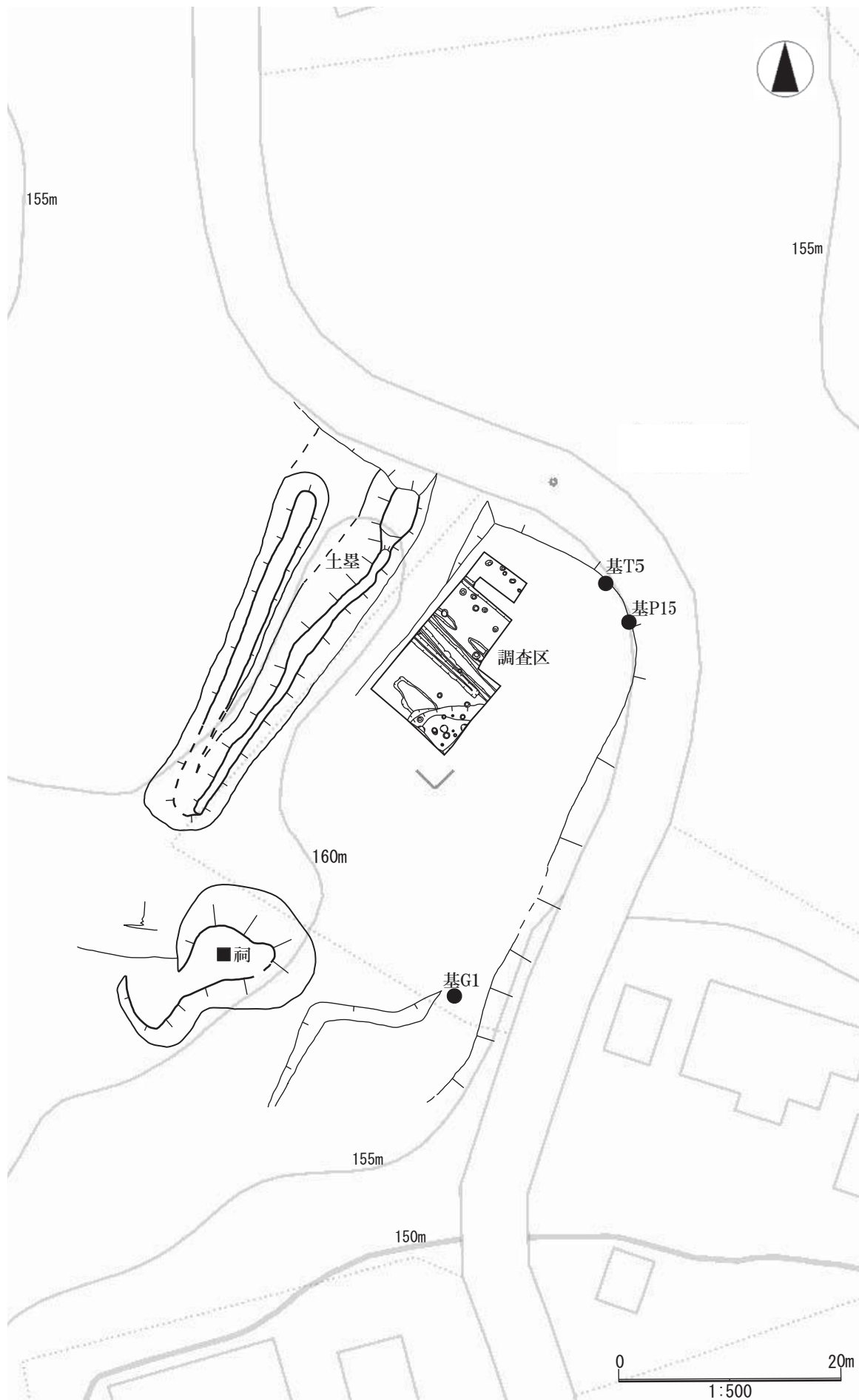


图 10 調査区位置图

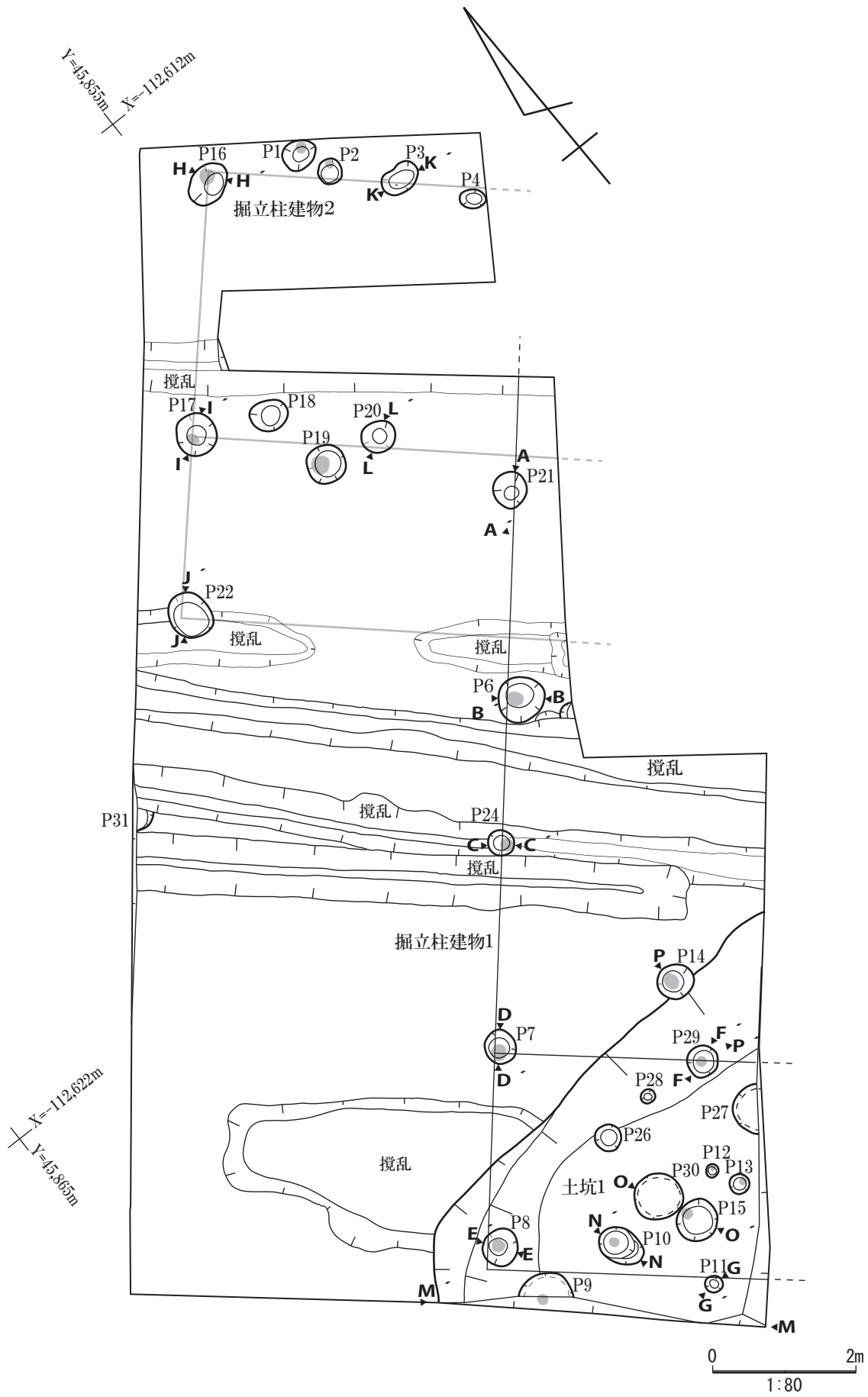
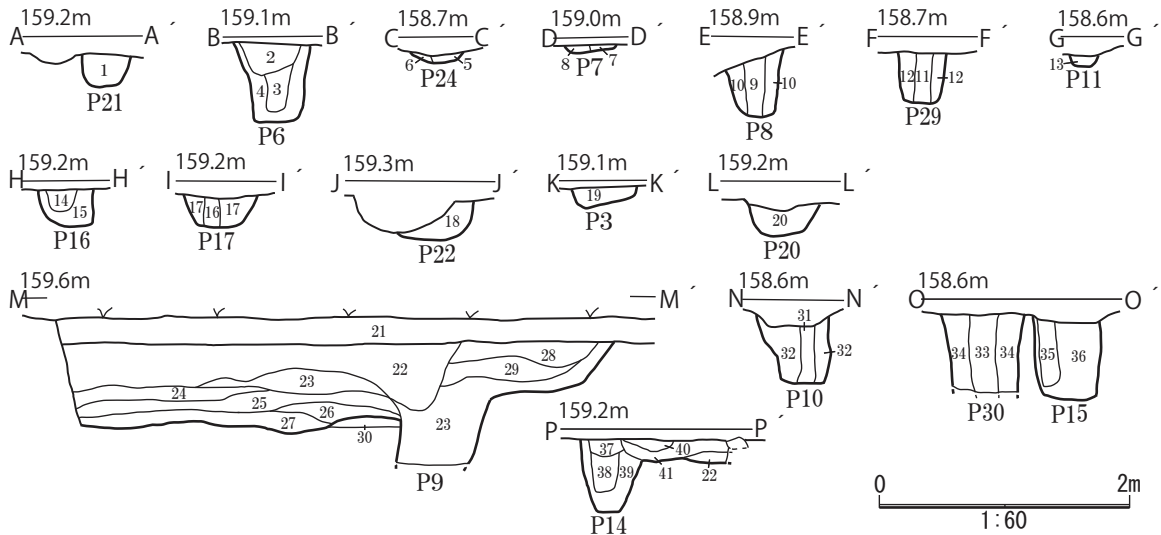


图 11 遺構平面図



土層注記

- 1 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～3.0cm大)が均一に5～10%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。P21の埋土。
- 2 10YR3/4暗褐色シルトに地山塊(径0.5～5.0cm大)が下位に多く10～20%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。P5の埋土上層。
- 3 10YR3/4暗褐色シルトにぶい黄褐色シルト塊(径0.5～3.0cm大)が均一に30～40%、地山塊が均一に微量混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。P5の据え方。
- 4 10YR3/4暗褐色シルトに暗褐色シルト粒が均一少量、地山塊(径0.5～3.0cm大)が均一に微量混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。P5の掘り方。
- 5 10YR4/2灰黄褐色シルトに地山塊(径0.5～2.0cm大)が均一に5～10%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。P24の据え方。
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～5.0cm大)が均一に30～40%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。P24の据え方。
- 7 10YR4/2灰黄褐色シルトに地山塊(径0.5～1.0cm大)が均一に少量混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。P7の据え方。
- 8 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～2.0cm大)が均一に10～20%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。P7の掘り方。
- 9 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊が均一に微量混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。P8の据え方。
- 10 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～10.0cm大)が均一に40～50%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。P8の掘り方。
- 11 10YR3/3暗褐色粘性シルトに地山塊(径0.5～3.0cm大)が下位に多く10～20%混じる。炭化物を微量含む。しまりなし。P29の据え方。
- 12 10YR3/3暗褐色粘性シルトに地山塊(径0.5～3.0cm大)が均一に多く30～40%混じる。炭化物を微量含む。しまりやなし。P29の掘り方。
- 13 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～2.0cm大)が均一に少量混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。P11の埋土。
- 14 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～3.0cm大)が均一に20～30%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。P16の据え方。
- 15 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～5.0cm大)が均一に30～40%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。P16の掘り方。
- 16 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～2.0cm大)が均一に少量混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。P17の据え方。
- 17 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～3.0cm大)が均一に30～40%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。P17の掘り方。
- 18 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～3.0cm大)が均一に5～10%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。P22の埋土。
- 19 10YR4/4褐色シルトに地山塊(径0.5～3.0cm大)が均一に10～20%混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりあり。P3の埋土。
- 20 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～2.0cm大)が均一に5～10%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。P20の埋土。
- 21 10YR3/3暗褐色シルト。砂質分を多く含む。炭化物を含む。粘性あり。しまりなし。草の根が多く入る。耕作土。基本土層I層。
- 22 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5～10.0cm大)が均一に30～40%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。土坑1の埋土。
- 23 10YR5/4にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～5.0cm大)が均一に20～30%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。土坑1の埋土。
- 24 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊が均一に微量混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。土坑1の埋土。
- 25 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5～3.0cm大)が均一に少量混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。土坑1の埋土。
- 26 10YR6/4にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～5.0cm大)が均一に20～30%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。土坑1の埋土。
- 27 10YR5/4にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～5.0cm大)が均一に20～30%混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。土坑1の埋土。
- 28 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊が均一に微量混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。土坑1の埋土。
- 29 10YR3/3暗褐色シルトに地山塊(径0.5～3.0cm大)が均一に少量混じる。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。土坑1の埋土。
- 30 10YR6/4にぶい黄褐色シルト。砂質分、マンガン粒を多く含む。粘性あり。硬くまる。地山層。基本土層II層。
- 31 10YR3/2黒褐色シルトに地山塊が均一に微量混じる。炭化物を微量含む。粘性強い。しまりなし。P10の据え方。
- 32 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～3.0cm大)が均一に20～30%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりやなし。P10の掘り方。
- 33 10YR3/2黒褐色粘性シルトに地山塊が均一に微量混じる。炭化物を少量含む。粘性強い。しまりなし。P30の据え方。
- 34 10YR3/2黒褐色粘性シルトに地山塊(径0.5～3.0cm大)が均一に20～30%混じる。炭化物を含む。しまりやなし。P30の掘り方。
- 35 10YR4/2灰黄褐色シルトに地山塊が少量混じる。炭化物を少量含む。粘性あり。しまりなし。P15の据え方。
- 36 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～2.0cm大)が均一に20～30%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりやなし。P15の掘り方。
- 37 10YR4/3にぶい黄褐色シルト。炭化物を含む。粘性あり。しまりあり。P14の据え方上層。
- 38 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～5.0cm大)が均一に20～30%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。P14の据え方下層。
- 39 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～5.0cm大)が均一に40～50%混じる。炭化物を微量含む。粘性あり。しまりあり。P16の掘り方。
- 40 10YR4/3にぶい黄褐色シルト。炭化物を多量に含む。粘性あり。しまりあり。土坑1の埋土。
- 41 10YR4/3にぶい黄褐色シルトに地山塊(径0.5～5.0cm大)が均一に10～20%混じる。上面に径20cm程の平たい石が入る。炭化物を多量に含む。粘性あり。しまりあり。土坑1の埋土。

図 12 土層断面図



1 猫館遺跡全景（南西から、無人航空機による空中撮影）



2 土塁（南から）



1 土塁と祠のある高まり(北から)



2 調査区全景(南西から、無人航空機による空中撮影)



1 調査区全景（直上から、無人航空機による空中撮影）



1 P21土層断面



2 P6土層断面



3 P24土層断面



4 P7土層断面



5 P8土層断面



6 P29土層断面



7 P11土層断面



8 P16土層断面



1 P17土層断面



2 P22土層断面



3 P3土層断面



4 P20土層断面



5 P2土層断面



6 P19土層断面



7 P11攪乱溝土層断面



8 P14土坑1北端土層断面



1 土坑1土層断面



2 調査区南壁土坑1土層断面



1 土坑1底面での柱穴確認状況



2 P27土層断面



3 P30土層断面



4 P15土層断面



5 P10土層断面



1 調査区東壁南半



2 出土遺物(外面)



3 出土遺物(内面)



4 表土採取遺物



調査風景

抄 録

ふりがな	へいせい28・30ねんどいちのせきしないいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成28・30年度一関市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	建長の碑遺跡・猫館遺跡							
巻次								
シリーズ名	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第25集							
編著者名	菅原孝明・畠山篤雄・二階堂里絵							
編集機関	一関市教育委員会							
所在地	〒021-8503 一関市竹山町7-5 TEL0191-26-0820							
発行年月日	2019年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
けんちょうのひ 建長の碑	いちのせきしかわさきちやうかん 一関市川崎町門 ざきあざいしぐら 崎字石蔵42-1	03209	NE98- 1314	38°56'13"	141°14'37"	20170307 ～ 20170330	8m ²	確認調査
ねこだて 猫館	いちのせきしだいとうちやうそ 一関市大東町菅 げいあざねこだて 慶字猫館69-3	03209	NF71- 1242	38°59'3"	141°21'45"	20180709 ～ 20180823	108m ²	記録保存 調査
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
建長の碑	石碑	中世、近世		集石		陶磁器、鎌刃		県指定有形文化財 の応急処置を実施
猫館	城館跡	中世、近世		土塁、掘立柱建物、 土坑、柱穴		陶磁器		
要 約	建 長 の 碑	平成28年3月に最明寺石塔婆の2つの碑が接触していたことから、応急処置をしつつ、平成29年3月から位置を正確に把握し現地保存するための確認調査を実施した。石塔婆が立つ地下の状況は、造立当初からの状態ではないと考えられる。トレンチは石塔婆据え方の確認にとどめた。						
	猫 館	個人住宅新築工事に伴う記録保存調査により、掘立柱建物2棟、土坑、柱穴を確認した。遺物は遺構外から出土したため、遺構の年代は不明である。当該地には中世から人が居住していたと伝えられており、今後の調査によってはそれを裏付けられる可能性がある。						

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第25集
平成28・30年度一関市内遺跡発掘調査報告書
建長の碑遺跡 猫館遺跡

発行年月日 平成31年 3月22日

発行・編集 一関市教育委員会
〒021-8503
岩手県一関市竹山町7-5
電話 (0191) 26-0820

印刷 川嶋印刷株式会社
〒029-4194
岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21
電話 (0191) 46-4161(代)